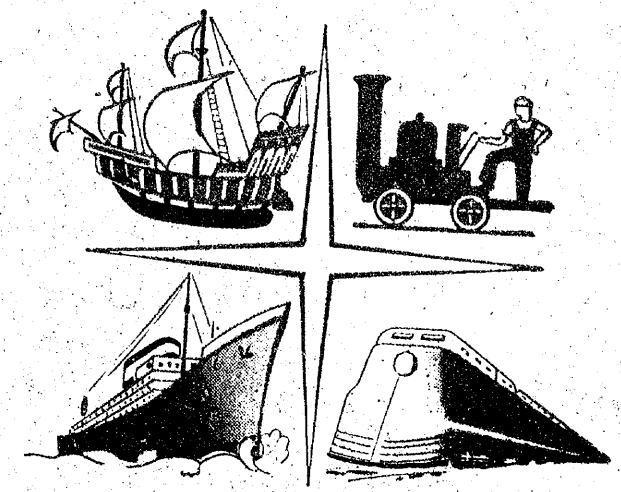
K250.3

1

13

社会科 13



文化遺産

K250.3
1
13

社　会　科 13

文　化　遺　産

目　次

第一章　社会と文化……2

Ⅰ　社会は遺産をのちの代に傳える……2
Ⅱ　文化は変化する……7
Ⅲ　社会と個人が文化を発展させる……10
（1）　傳ぱと交流……10
（2）　個人の努力……12

第二章　手から機械へ……17

Ⅰ　人間の手は何をして來たか……17
Ⅱ　技術の発達が人間の生活を変える……20
（1）　活字への要求……20
（2）　印刷機の力……21
Ⅲ　新しい原動機が新しい社会をつくり出した……23
（1）　原動機に対するあこがれ……23
（2）　ジェームス＝ワットの時代……25
（3）　その影響……29
Ⅳ　新しい社会の要求が発明や発見をよびおこす……30

第三章　思想の表現と交換……34

Ⅰ　ことばは重要な遺産である……34
Ⅱ　ことばは歴史を持っている……37
Ⅲ　日本語を育てよう……39
Ⅳ　思想は次第に遠く早く傳えられるようになった……41
Ⅴ　人々はどうして自由に意見を交換しているか……43

第四章　生活の規則と様式……48

Ⅰ　社会の制度はどういう意味を持っているか……48
Ⅱ　社会の慣行は容易に変化しない……51
Ⅲ　われわれの衣食住についても慣行がある……53
Ⅳ　生活様式はいろいろな点で改善を要求されている……55
Ⅴ　生活の傳統はどんな價値を持っているか……57

昔はこんなものはなかった，こんなことはしなかった，とあなたがたのおじいさんやおばあさんがいうのを聞いたことはないだろうか。それは世の中が変わって行くことをあなたがたに教えるだろう。あなたがたは，新しいものや新しいことに興味を持っている。けれども概して老人は古いものに心をひかれがちである。なぜそうなのか，それはあなたがたに考えてもらおう。ここでは，世の中には古いものと新しいものがあり，そのどれもがわれわれの生活には必要であるということを学んで行こう。

しかし，古いものと新しいものを，世の中の生活にとって，たいせつな，役に立つものにするのは，われわれの努力にほかならない。古いものと新しいものとは，いつもいっしょになっている。よくいわれるように，新しいものも古いものから生まれて來る。近ごろ，はやっているライターも，古い昔から使われていた火打ち石から生まれたものともいえる。祖先が残してくれた古いものを，だいじにすることはたいせつである。しかし，世の中が進むにつれて，古いものの中には，役に立たないものや害になるものも出來て來る。われわれは古いものを，むやみにとうとぶようなことをしないで，それを現在や未來の幸福な生活のために，改めたり，あるいは思い切って捨てたりしなくてはならない。いちいちの場合について，どれをどうするかをきめるのはなかなかむずかしい。しかし，正しい判断ができるように，あなたがたは，なぜそうしなくてはならないかを自分でよく考え，自分で理解することが必要である。

文化遺産

この本を読みながら考えてみること。

Ⅰ　われわれが生活して行く上に，過去から何も受けつぐものがなく，何もかも新しく始めなければならないとしたら，どうだろうか。

Ⅱ　自分が望み，世の中が望んでいる生活を送るには，どんなものが役に立ち，どんなものがじゃまになるだろうか。

Ⅲ　新しいものと古いものとは，どういう努力によって，われわれにとって最も價値のあるものになるだろうか。

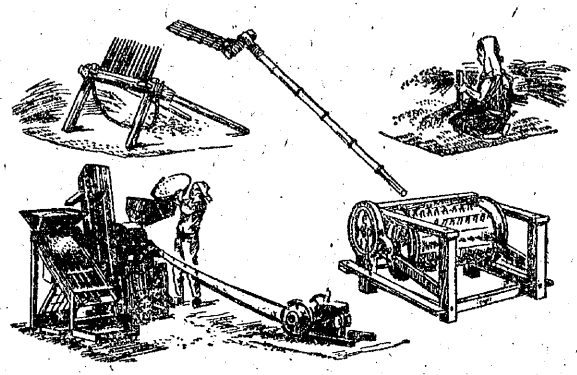
第一章　社会と文化

Ⅰ　社会は遺産をのちの代に傳える。

かりに，ロビンソン＝クルーソーのように，自分ひとりで全くあらたに生活を始めなくてはならないと想像してみよう。たべもの，着るもの，住むところ，この三つの要求をみたすために，あなたがたは，ロビンソン＝クルーソーのやったと同じような努力をはらわなければならない。寒さをしのぐために着る衣服一枚つくるにも，獣をとって，その皮をはぎ，日に乾しておくとか，木の皮をさらして繊維をとって，それを織るとかしなくてはならない。しかし，鉄砲も弓もないとすれば，どうして獣をとることができよう。はた織り機械はどうして作るのだろう。ロビンソン＝クルーソーはまだよかった。かれは少しではあるが，鉄砲やおのや板や穀物の種など，自分の社会が作ってくれた道具や物を持っていた。その上，進んだイギリスの社会でやっていたいろいろなものの作り方を知っていた。もし，そういう道具も持たず，

ものの作り方も知らないとしたら，あなたがたは動物のように，生まれたままの姿で，偶然に手に入る木の実や草の根をたべて，木の枝の繁みの中や岩のかげにでも寝て暮らすほかはない。それはつまり人間らしくなくなることである。

そんなに極端には考えなくても，衣食住の要求をみたすために必要な道具を祖先が残してくれなかったと仮定すれば，われわれ現代人は，たいへんな苦労をしなくてはならないことになる。あらたに土を耕すくわやすきを作るだけでも，どれほど手数がかかることであろう。そして，作ってみたところで，長い間の人間の経験によって，使いよくなった今のくわやすきに遠く及ばないものであるに違いない。それはロビンソン＝クルーソーが作つた木のすきのようにそまつなものであろう。

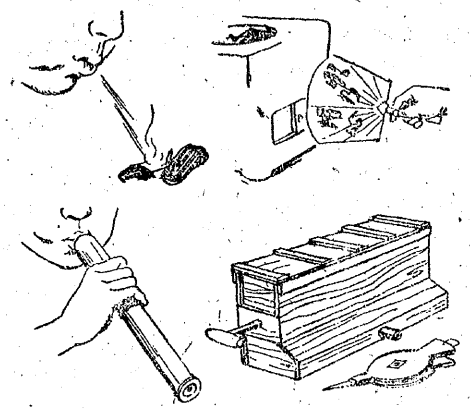


農具の変遷

われわれが毎日の生活を送るのに必要ないろいろのものは，すべて祖先が作ったり，改良したりして，現在まで傳えてくれたものである。今の人が作ったものでも，その作り方や形や材料などは，すべて過去から受けついで來たのである。衣食住に必要な生産のしかた，その道具，衣食住の様式，たとえば家の形・材料，さらにことばや文字，いろいろな社会の施設や制度，それから社会の習慣など，みな社会が過

去から受けついで來たものである。そのほか思想とか信仰とかいうものも，また過去がわれわれに傳えて残してくれたものである。個人が遺産相続をするように，社会もまたこういういろいろなものを傳え，受けとり，そしてそれを次第に洗練し，豊かにして，向上と進歩とをはかって行く。

われわれは社会が残してくれたこういう遺産の中に生まれて，育つ。農民は昔からやって來たと同じ方法で，同じ道具を使って耕作する。大工もまた昔からのしきたりにしたがって，家を建てる。昔から行われて來た習慣や制度にしたがって，日々の生活を送る。世界各地でも，農民は耕し，大工は家を建てることに変わりはないが，社会が違うとその方法や用いる道具に違いがあるのは，各國人が違ったことばを使わなくてはならないのと同じである。過去が残してくれたこういうものを，前には個人の遺産にたとえたが，違うところは，個人の遺産は單に個人の所有物であるけれども，社会の残してくれたいろいろの遺産は，われわれの所有物には違いないが，個人としてのわれわれは，それを單に思いのままに捨てたり，かってに選んだりすることはなかなかできないということである。むしろ個人は，魚が水の中に生まれて育つように，過去の残してくれたいろいろのものの中に生活し，そ



火の起し方の進歩

れによって生活全体のしかたがきまる。ちょうど，同じ水の中にすむ魚でも，浅い海にすむものと深い海にすむものとが，色や形や運動のしかたなどが違うように，社会の違いによって，その社会の個人も違って來る。つまり社会の残してくれる遺産によって，社会生活の性格が出來上がるのである。しかし，個人の新しい考えや新しい生活のしかたは，社会に受け入れられ，社会生活を変えて行くものである。たとえば，昔は地面は平らであると考えられていたが，地球は丸いものだという考えが人々に受け入れられて，社会生活の上にもいろいろな変化が起って來たのである。

ロビンソン＝クルーソーの食物・衣服・住居は，みすぼらしく貧しかった。しかし，かれは孤独をなぐさめてくれるおうむを友とし，さらにその心の中には，イギリスの友人たちの暖かい記憶と再会の希望とを持っていた。人間は死なないだけのためならば，簡單な衣食住の生活で事足りる。しかし，人間は多くのものがいっしょに生活して，自然の環境にしたがって，いっそう自分たちの集團の生活が豊かになるように，より安全に，幸福に生活ができるように，努力する。そのためには，からだにはこれといって武器を持たない人間は，力を合わせてくふうする。はじめは，人間も，自然にはえている草の芽や根や木の実をたべていたに違いないが，その時代の人々は，おそらく野山の鳥や獣のように，いつも食物に不自由をしていたことであろう。野生の動物を捕ってたべても，やはり同じように，常に食物が得られて，いつでも空腹を満たすことができたとはかぎらない。天候の不順やその他の原因によって，食料が手にはいらなかった時は，集團は恐ろしい餓死から免かれなかったこともあったであろう。

やがて，人類は野生の動物をならして飼うことができるようになり，また，食用の植物の種をまいて，それを收穫することを知った。食糧はほしい時に得られるようになる。收穫物は保存される。この進歩は

どんなに大きな生活の安定を人間にもたらしたことであろう。それは何千年という長い年月の間に，徐々に行われたので，その間にはどんなくふうと試みと失敗とがくり返されたかもしれない。

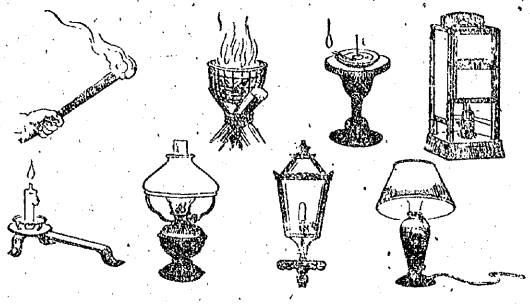
そのようにして，次第に食物の安定が得られるようになったが，それは衣服や住居についても同じことである。集團生活の安定のために人間の生活は幾分ずつでも計画的になり，複雑な組織を持つようになる。生産の方法が採取や狩猟から牧畜や農耕へと変わって行くにつれて，それぞれの仕事に計画を立て，その能力に應じて仕事も分かれて來る。多くのものが共同して集團のために生産に従事するには，生活の規則や習慣が必要になる。

生産に使う道具も，木から石へ，石から金属へと新しい材料が発見されて行く。形も用いよいように改良される。道具の製作に経験がたいせつになる。そういう道具は，だれでも作るというわけにはいかなくなるから，そこに專門の技術家も必要になる。仕事はますます分かれ，それとともに技術が発達し，分業による共同のための社会の規則はますます複雑になって來る。集團全体の生活が次第に安定すれば，美しいもので生活を飾り，樂しいレクリエーションを求める欲求も生まれるであろう。また，複雑な集團生活を統制して行く方法も次第にむずかしくなり，政治の働きが，ますますはっきりとした形をとるようになるであろう。こうして社会はますます複雑になるとともに豊かになる。人間の精神的，物質的な生活活動を豊かにするこういういろいろなものを，われわれは文化とよんでいる。あなたがたは，自分たちの生活をふり返り，自分がどんな文化を受けつぎ，その中で生活しているかを考えてみるとよい。そこには，人間らしく生活ができるように，過去から受けついで來たいろいろのものや生活のしかたなどがある。衣食住のしかた，いろいろな道具，いろいろな制度や施設，禮儀や習慣，科學や藝術　すべては祖先の経験とくふうの遺産であるこ

とがわかるであろう。それらをとってしまえば，あなたがたは，ただ，たべて着て寝るだけの動物になってしまう。

II　文化は変化する

あなたがたの中には，おばあさんが自分で機を織って，じょうぶな手織を作るのを見た人もあろう。昔はそのようにして，われわれの衣服にする織物が作られていた。今では，手織りは珍しい上に，じょうぶであり，また一種の素ぼくな美しさを持っているところから，一部の人々に好まれ，とうとばれている。しかし，現在では，一般には，大きな工場で，複雑な機械によって，一時に大量に織物が生産される。われわれが普通着ている衣服は，すべて，どこで，だれに作られたかわからない織物から出來ている。また，われわれは今何の不思議をも感じないで，明かるい電燈のもとで，読書や談話に樂しい時を過ごしているが，今から数十年前には，まだ電燈はわが國では珍しかった。電燈のなかった時代のありさまは，停電の夜の不自由さを思えばわかるであろう。



あかりの変遷

このような二，三の例だけでも，われわれの用いているものが時代とともに変わって來たことがわかる。あなたがたは自分で，人間が使う道具がどんなに変化して來たかを調べてみるとよい。今は何でもないと思われるものが，はじめて人間によって作り出されたのが，そん

なに古いことではないことを知るであろう。そういう変化はどうして起るのだろう。糸をつむぐ機械がどうして生まれて來たかを見よう。

数千年の間，人間は綿やまゆや動物の毛から，自分の手で糸をつむいで來た。農村の静かな風景の中で，糸車はのどかにまわり続けて來た。はじめは，自分たちの家の生活に必要な糸をとるだけでよかったが，世の中が次第に織物を多く求めるようになると，手工業として，世の中の需要をみたすために，多くの糸をとるようになった。交換経済の発展が糸の需要を増したのである。糸をもっと早く，もっと不ぞろいでなく，とることができれば，糸の生産の量もふえ，質も改善されるであろう。そういう要求は紡績機械の発明をうながすようになる。イタリアでは，17世紀ごろには，まゆから糸をとる複雑な機械が用いられていたが，綿の紡績機を作り出したのはイギリスである。ひとりの労働者が二本の手で一本の糸をつぐむのは，どんなに熟練しても，その生産の量には大した変わりはない。もしひとりの労働者が，同時に何本もの糸をつむぐことができたら，糸の生産の量は急にふえるであろう。１７３０年代に，イギリスのジョン＝ワイアット[1]がその道を切りひらいた。ついに機械が人間の手にかわって，糸をつむぎ出したのである。ついで，１７６４年から１７６７年にわたって，ハーグリーヴス[2]が新しい紡績機を考案した。かれの機械「ジェンニー」は，ひとりの労働者で，それまでの６人から８人分の仕事を一度にするようになった。１８世紀の終りには，イギリスのアークライト[3]は，水車を用いて自分の考案した紡績機を動かし，大きな工場を経営し，数百人の労働者をもって大量生産を始めた。こうして機械が労働者の手のかわりをするようになると，新しい産業組織が生まれて來る。大規模な

（1） John Wyatt 18世紀のイギリス人
（2） James Hargreaves （？——1778）イギリス人
（3） Sir Richard Arhkright （1732——1792）イギリスの紡績機械の発明者

機械や工場をつくり，大量の原料を買うことのできる資本家と，機械によって生産に従事する労働者が出來て來る。ここに産業革命の舞台の幕が開いたのである。

機械は比較的少数の労働者で，一度に大量の糸を生産するから，安い値段で糸を供給することができる。織物は安くなる。安くなればますます需要が増して來る。それまでは，高いためにあまり織物を買うことのできなかった人たちの間にも，新しい織物が普及して行く。糸ばかりたくさん出來ても，はた織り機が昔のままの状態では，これをこなして行くことができない。やがて，はた織り機の発明・改良がこれに続き，織物工業も大量生産にはいる。さらに新しい染料が発見され，染色機械が発明され，大量の染色ができるようになる。こうして，多くの新しい種類の織物が安く人々の手にはいる。人々の衣服生活は，そのおかげで変わって來た。種類は豊富になるとともに，また同じ種類のものを，多くの人々が一度に用いることもできる。

これは織物についてばかりではない。社会の発展はいろいろの要求を生み出して來る。その要求が新しい道具や機械の発明をうながすとともに，新しい生活の姿をも生み出すのである。織物への要求と機械の発明が産業革命をもたらし，産業革命はまた新しい社会組織を作り出す。それはまた，新しい思想をさえ生み出すのである。

このような機械に対して，反感を抱いた人々もいる。アークライトの工場では，機械が労働者のかわりをつとめ，それほど熟練していない人たちでも仕事ができるので，多くの熟練した労働者が失業した。失業した労働者たちは，それを機械のせいにした。アークライトのイギリスのランカシアの工場が，かれらによってこわされるような事件も起った。

また，田園の静かな風景，古い時代の穏やかな人間生活を愛する詩人や藝術家たちは，機械の騒音を好まなかった。ことに蒸氣機関の発

明にともなう，あのほこりっぽい煙突の煙は，美しさをこわしてしまうものと感じられた。今でも機械は人間を不幸にすると思う人たちがいる。しかし，こういう人々の反対にもかかわらず，機械化は進む一方である。それにはいろいろの理由があろうが，結局，社会がそれを要求するからである。イギリスの画家ターナーは，蒸氣機関車の美しさを，はじめて表現した藝術家だといわれている。[1] 美しさに対する人間の氣持もまた変わるのである。

あなたがたは，機械の進歩，生産の機械化について，どう思うであろうか。機械の発達にともなういろいろな社会の問題について，どう考えるであろうか。また現在の複雑な精巧な機械に美しさを感じないであろうか。とにかく，機械はますます発達するであろう。社会はそれを要求しているのだから。映画やラジオや航空機や，そういう機械がどんなにわれわれの生活を変えていることであろう。そういうものが出來たのはつい最近のことである。今では，われわれは，それなしには日常の生活を考えられなくなっている。

Ⅲ　社会と個人は文化を発展させる

（1）　傳ぱと交流

都会から遠く離れた山の村でも，今では子どもたちが洋服を着ている。便利なもの，人の心をひきつけるものは，どんな遠い所へでも次第にひろまって行く。そこには，人々の模倣の心理も働き，流行の現象も起る。ある社会にそれまでなかった新しい文化は，こうしてよその社会からはいって來る。これは文化の発展にとって，だいじなことである。どこの社会にも，新しいものを好まない人たちと，ひやみに新しいものが好きな人たちがいる。そういう人たちには，それぞれ理由があって，新しいものに反対したり，新しいものを好んだりしている

（1）　George Turnur (1775——1851)イギリスの画家

るのである。しかし，現在では便利なものや，いっそう生活を容易にし豊かにするものは，それに対する人々の個人の意見には，違いはあっても，次第にどこの社会にも取り入れられるようになって來た。

昔の社会ではなかなかそうはいかなかった。明治のはじめに電信が架設された時には，日本人の中には，それが何か不幸をもたらすと考えて，夜中に電信線を切りとってしまうものもいた。武士は電信線の下を通る時は，からだがけがれるといって，頭の上に扇をかざしたということである。これは無理解から起った喜劇であるが，そういうことは新しいものに対しては，いろいろな形で起ったのである。日本の歴史の上では，しばしばそういうことがあった。佛教が傳來した時には，これに反対する人たちがいて，これを信じようとするものとの間に，長い間争いがあったことは，古い書物(日本書紀)に出ている。キリスト教は，徳川幕府によって厳禁され，ひそかにこれを信じたものは圧迫を加えられた。「蘭学（らんがく）」とよばれた西洋の学問も，なかなか爲政者に理解されなかった。

しかし，それでも優れたものは世の中が変わるにつれて，水が地面にしみるように，次第に日本の社会に受け入れられて成長した。それには，ほんとうに日本の國や社会を愛して，優れたものを取り入れようとする先覺者たちの努力があったことを忘れることができない。とにかく一般に維新前の社会は，今までなかったものを取り入れるのを，好まない傾向が強かった。今までのしきたりや，今まで通りの生活を，新しいものがはいって來て，こわしてしまうと思われたからであり，また新しいものによって，今まで自分たちが保っていた力が失われることを恐れる人たちが反対したからである。佛教が傳えられた当時，佛教に反対したのは，おそらく神々を祭ることをつかさどっていた人たちであったであろうし，蘭学が盛んになった時，これに一番反対したのは，幕府の役人や，古い教養を持った学者たちであった。

新しい文化に接してこれを自分たちの要求に適するものにすると，その社会の文化は豊かになり，発展する。それに反して，違った社会の文化に接することもなく，かりにそれに接しても，その社会が，これを取り入れようとする要求を持たず，これを進んで自分のものにしようとしないならば，その社会の文化は進まず，全体としてその生活は向上しない。これは文化が発展した時代の社会を見るとよくわかる。大きくいえば，古代ギリシアでも，インドでも中國でもそうであった。近代ヨーロッパの文化も，中世の終りからヨーロッパのいろいろの民族が接触し合ったことによって発展した。

たとえば，十字軍が東方の世界と接触して，今までヨーロッパ人が知らなかった文化を知り，大きなしげきを與えられたことなどが，その文化の発展に影響を與えている。

ある文化は，ある社会，ある民族が作り出し育て上げるものであるが，しかし，一方では，ある社会や民族は他の社会や他の民族が傳えてくれたものをいっそう発展させたり，自分のものとしたりして，さらにそれに新しい價値を與えて行くのである。文化は自分の社会のものであるとともに，人類の遺産である。われわれの衣食住の中にも，われわれは中國やヨーロッパの遺産を見出だすことができる。こうして世界の人類は，文化を通じてたがいに結びあっているのである。

（2） 個人の努力

ピストン附きの蒸氣機関の発明者，ドニ＝パパンは，哲学者ライプニッツ[1]に次のような手紙を書いている。

「私[2]は，神さまが私にお與えになった才でもって，この世に奉仕できることだけをやろうと思っています。永遠の眞理の中にはいって行き，そして，後世のために樂な近道，その上をたどってはじめて後世がいっそう偉大な進歩に達することのできるような道を，創造するという仕事は，あなたがたのような，何ごとにも通じている偉大な精神に，おまかせしようと思っているのです。」

（1） Denis Papin （1647——1712）フランスの自然哲学者，発明家

（2） Gottfried Wilhelm Leibniz （1646——1716）ドイツの哲学者，数学者

このことばは，発明家の仕事と，眞理への探究を志す学者の仕事をよくいいあらわしている。眞理への愛に燃えて，自然と社会との理法を見出だそうとする科学者たちは，世の中から何の報酬をも求めず，ひたすら眞理への愛に生きぬいたのである。そういう学者たちの名まえは，人類の歴史にちりばめられた珠玉のように輝いている。また，発明や改良につとめて，社会と人類に恩恵を残した多くの人たちは，世の中を幸福にしようとする精神にみちあふれていたに違いない。日本の江戸時代の技術家平賀源内は，「日本の益をなさんことを思う」といっている。この精神に貫ぬかれて，世の中のためにその才と力とをささげた人々が，人類と社会の文化を押し進め，次第に人間を不合理な苦しみから救い出してくれたのである。

しかし，世の中は概して新しいものを望まない。一方では，自分たちが幸福になることを願いながら，新しい考え方や道具や機械などが，そういう要求をみたしてくれることを，理解することができないのである。また，一般に世の中はそれを理解できないから，新しいものを取り入れて行くことに危険さえも感ずるのである。だから，先覚者や発明家たちは，多くの場合，その努力が直ちに世の中に認められず，世の中は自分を幸福にしてくれる人たちをたいせつにしない。あなたがたが発明家や発見者の傳記を読むと，世の中の無理解と戦って，しかも世の中のために，その才と努力とを傾けつくした人々のとうとい一生を見出だすであろう。

昔の世の中ほどそうであった。それは一部の人たちがみち足りた生活をしていて，多くの民衆の幸福がまじめに考えられていなかったからである。人間は，次第に，民衆のすべてが幸福にならなくては，結

局，社会全体が幸福になることはできないということを知るようになった。最近では，世の中は，発明や発見が民衆の生活を向上させるものであることを理解している。現在の社会や國は，発明や発見を奨励するようになった。しかし，まだまだ十分であるとはいえない。あなたがたは，郷土でいろいろの方面のくふうや改善によって，郷土のためにつくす仕事にその努力をささげて來た人たちが，世の中からどういう扱いを受けて來たか，また現在受けているかを，よく見るとよい。それによって，あなたがたは郷土の社会について，いろいろのことを学ぶであろう。

世の中のために新しいものを作り出す人たちは，二つの困難にぶつかる。一つは，今までだれも歩んだことのない道を切りひらこうとする時に出あう困難であり，これはすべての発見者や発明家が経験するところである。もう一つの困難は，先にもいった世の中の人の無理解と戦うことである。しかし，後の困難は時代や社会やその人の運命によって，多少の違いがある。よい理解者を得て，幸福にその仕事をなしとげた人がないでもない。けれども，たいていの場合，その人に反対する人たちがいた。

社会の風習や制度や組織を改良しようとする人たちには，この二つの困難がいつも同時に襲って來る。人間に機械をしたがわせて，労働者の生活を機械のもたらした不幸から救おうとした，イギリスの社会改良家ロバート＝オウエン[1]は，そういう困難を経験したひとりである。産業革命が進むにつれて，労働者は機械の発達によって悲惨な状態におちいった。オウエンは，労働者の生活改善や，少年や婦人の労働條件の改善や，少年教育のために努力した。かれは，労働法や工場法の必要をとなえた最初の人である。今では多くの人たちの常識にさえなっているかれの考えも，当時の人たちにとっては新しすぎ，実現が困

1) Robert Owen (1771——1858) イギリスの空想的社会主義者

難だと思われた。改良しようとするのが人間の社会であり，そのような改良によって自分に不利が來ると考える人たちがいる以上，その困難は避けられなかった。奴隷解放のために戦ったリンカーンも，心ない人の毒手にたおれた。そのほか，婦人を解放しようとする人たちや異民族に対する偏見をとりのぞこうと努力した人たち，あるいは宗教の傳道者たちもまた，困難と戦わなければならなかった。わが國でも，自由民権のために戦った板垣退助などはそういう人たちのひとりである。

社会の風習や制度や考え方の改良につとめた人たちの仕事は，しかし，だんだんにその影響をあらわして來る。それは，はるかにのちの世になってその正しさを認められることもある。しかし，人々の間にその生活を向上させようとする強い要求のある社会では，次々にその仕事を受けつぐ人々があらわれる。そして，やがてその人々の美しい意志や思想を実現する。

すぐれた個人によって作られ，改良された道具や機械，またその思想は，こうしてその人々の手を離れて社会の共通の文化遺産となって行く。

研究すべき事項

問 1. できたら，ロビンソン＝クルーソーの物語を読んで，かれが，その故郷の社会から受けついで持って來たと考えられる社会の遺産をすべて表にしてみること。

問 2. 自分たちの衣服の織物はどうして作られるか，はじめの原料から調べてみること。原料や織り方の歴史を調べること。

問 3. 附近の織物工場をたずねて，紡織機を研究すること。織物を作る一番たいせつな部分を簡単に図解すること。

問 4. 自分の生活でつねに用いられているものについて十種をあげ，それが

現在のようなものになるまでの歴史を調べてみること。

問5　書物によってコンパスや火薬の歴史を調べること。なぜヨーロッパでは近代文化が発展したか，社会と社会，民族と民族の接触が文化の発展にたいせつな点を特に研究すること。

問6　郷土の生活の改善，農事の改良，産業の振興などに努力した人の傳記を作ること。その人たちは，郷土からどんな待遇を受けたろうか。その恩惠はどんな形で残っているか。

問7.　発明家，発見者の傳記を読み，その人たちの努力の目的を研究すること。

問8.　発明家，発見者の仕事はどういうふうに社会に受け入れられて行くであろうか。どういう社会がその恩惠を一番生かしているだろうか。

問9.　現在流行しているものについて数種を選び，それらがなぜ流行しているかを研究すること。

（すべて調べたことをもとにして討議すること。）

第二章　手から機械へ

I　人間の手は何をして來たか

われわれの農村では，土を耕すことから始めて，作物を收穫し，加工するまで，多くの仕事が農民の手によって行われている。もちろん耕作には，馬や牛も使われているが，それも大したことはない。ところが，アメリカなどの農業では，耕作や收穫や加工に大規模な機械が用いられている。農業もまた機械化することができる。機械は人間の手のかわりをする。しかも，機械は手のかわりをするだけではなく，製品の質や量に，非常な変化を與えている。けれども，どんな機械でも，人間の手がなかったら，作られもしないし，動きもしない。人間の手は人間の歴史のすべてを作り上げて來たとさえいえるであろう。

手をよく見たまえ。自由にものをつかむことができるように，四本の指と親指との関係が非常にうまくできている。これは指が次第にいろいろなものを握るのに適するようになったからだといわれている。人間の手は，生活上の複雑ないろいろの仕事を受け持つようになった。石を投げて木の実や鳥を落すのも手である。重い石や木材を運び，地上にこぼれ落ちたあわや麦粒をつまむのも手である。手ぶりで自分の意志を他人に傳えたり，方角を指でさし示したり，握手したり，さらに，やがて巧みな画を描いたり，困難な手術をするようにもなる。手はこのように人間の生活の中で重要な位置を占めている。試みに「手」のつくことばを考えてみよう。「手落ち」「手ぎわ」「手入れ」「手当て」「手引き」「手ほどき」「手おくれ」などのことばが，手に関係はしているけれども，もっと廣い意味を持つようになっているこ

とを見出だすであろう。ついには，手は人の意味にもなった。「働き手」「手下」「手がない」ということばは，明らかに人をさしていうことがわかる。「手をさしのべて」「手をとりあう」人間の道徳的な行爲をあらわすのにも，「手」ということばが用いられている。

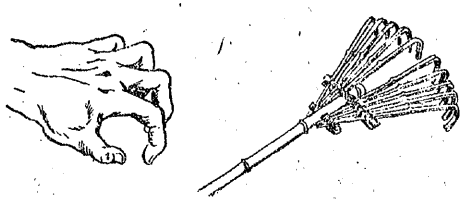
この手はいろいろの道具を使う。ある種のさるも簡單な道具を使うことが明らかにされている。棒きれで手のとどかないところにある木の実をたたき落したり，引きよせたりするさるがいる。しかし，かれらは，道具をつくることを知らない。フランクリンは，人間を「道具を作る動物」といったが，たしかに人間は道具を使うばかりではなく，自然の材料に手を加えて，道具を作り出す。人間の祖先が，道具を使いはじめ，その道具を作り出したことが，人類に複雜な歴史の道を切りひらかせることになったのである。

骨の針

原始時代の人類が使った石のおの，石の小刀，石の矢じり，その他のものがいろいろ発見されている。そのような道具は，それを使っていた当時の人類の生活をある程度まで，われわれにわからせてくれる。その道具は簡單な不器用なものであるが，それが作り出されるまでの長い年月を，あなたが たは想像することができるであろうか。人類は，おそらく数十万年も前に，手のたいせつな働きを知り，それからその手をいつそうよく働かせるために，道具を見出だしたのである。

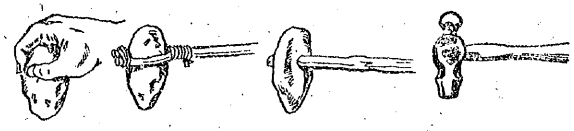
一本の棒切れは腕を長くすることができたし，堅い石を握ぎって，げんこつのかわりにすることができた。道具は，もともと，手，すなわち人間のからだの延長にほかならない。だから道具は手の形に似たものから始まったのである。石のおのはにぎりこぶしの形をしている。曲げた指はくわになり，手のひらは盆になり，鋭いつめを持った堅くなった人さし指がきりになり，剣ややりやかいやシャベル，くま手，すきなども，つめや伸ばした腕や手のひらや，曲げた指にかたどられ

る。ギリシアの哲学者アリストテレス[1]がいったように，手は道具の中の道具なのである。



手の形と道具の形(1)

このようにして出來た道具は，はじめは手が何でもするように，いろいろな目的に用いられた。はじめは物をとったり作ったりする道具と武器の区別はなかったらしい。同じ石器は，くるみを割るためにも使われたであろうし，敵の頭を打つためにも使われたであろう。今でも，われわれはひとつの小刀でなしもむくし，ほかに道具がない時には，それで土を掘ったりもする。しかし，それはやはり不便である。土を掘るためには，小刀よりはシャベルがぐあいがよい。このような要求が多くの道具を作り出し，形も次第に用途にしたがって，使いやすいように変化した。われわれは，もはや茶わんの形に水をすくう手の姿を見出だすことはできないし，小刀に人間のつめや歯を思い出すこともできなくなった。このようにして，徐々に道具は精巧なものになって行ったが，しかし，やはり人間の手は，道具を作り，道具を使って，さまざまなことをなしとげて來た。勤勉な手，精巧な手，強い手，いろいろな手が人間の歴史を作り出して來たのである。



手の形と道具の形(2)

道具の発展

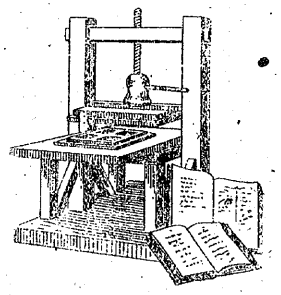
(1) Aristoteles (前384—322)ギリシアの大哲學者

Ⅱ　技術の発達が人間の生活を変える

（1）活字への要求

おそろしくこんでいる乗物の中で，学生や一般の青年たちが，書物をむさぼるように読んでいるのをよく見かける。見た目には，きゅうくつで，あまり楽しそうではないが，活字に対するその欲求の強さがよくわかる。このような読書欲は，いたるところに見られる。社会の文化が一般に向上したのがその原因であるが，それには，印刷術が発達して，書物が普及し，活字に人々が親しむようになったことも忘れられない。いまでは，印刷された文字は生活必需品でさえある。

昔は棒で土に字を書いた。だが，のちには筆やペンが発明されて紙に字を書くようになった。しかし一字一字手で書くほかはなかったのであるから，そうして出來た書物を読むことのできるものは，限られた少数の僧や学者たちであった。[1] 字を読んだり書いたりできる人々がまれだったのである。一般のものは字も知らず，したがって，その生活に書物は全く必要ではなかった。やがて木版術が考え出されるようになると，同じ書物が一度に幾分か多く出來るようになった。



グーテンベルクの印刷機

われわれが現在用いている印刷機と，取りはずしのできる活字の発明は，1440年代にドイツのグーテンベルク[2]とその助手によって完成されたといわれている。木版はいちいち板に字を彫って，それに墨をつけ，一枚一枚刷って行く。その手数はたいへんであり，じ

（1）お経や聖書を写した写字生の話は東洋にも西洋にもある。

（2）Johann Gensfleisch Gutenberg（1400頃——1468頃）

たがって書物の値段も高くつく。違った書物を刷る時には，全部新しく版木を彫り直さなければならない。ところが，活字は字母があれば同じ鑄型で幾つでも出來る。それを拾って版を組めば，それで印刷ができるし，さらに紙型を作っておけば，活字をくずしても，いつでも必要な時，いくらでも版が出來る。違った書物を刷る時には，またその活字を拾って版を組めばよい。活字と印刷機の発明は，どれほど書物の出版を容易にしたことであろう。

その発明後10年もたたない，1450年代の末までに，ドイツには，修道院や城にあるものをのぞいても，1000台以上の印刷機があったといわれている。この便利な道具を，自分たちだけで秘密にして，独占しようとした人々が多かったが，それにもかかわらず，非常な勢いで普及して行った。それは書物を欲していた当時のヨーロッパの人人の要求にこたえたからである。

（2）印刷機の力

文字の印刷が容易に一度に大量にできるようになったことは，一方では，書物の値段を安くすることにもなった。印刷物は早く，また廣く読まれるようになり，そうして印刷された文字を通じて，遠くの人人に思想を傳えることも容易になった。その上，印刷された文字は，正確で，きれいだから，手で書かれた文字よりずっと読みやすい。民衆も印刷された文字によって，次第に耳や目で直接知るほかなかった狹い世界から解放されて，だんだん廣い世界のことを知るようになった。中世は，ヨーロッパでも，日本でも，民衆が狹い限られた世界にとじこめられていた時代であったが，印刷術の発達のおかげで，ヨーロッパには新しい世界がひらけて來たのである。

人々の思想をあらわす書物は，一度に部数を多く印刷することができるようになったから，多くの人々の手に渡るので，どこかで保存されるようになり，後の人々の手にもはいりやすくなった。これが科学

や技術の発展に大きな貢献をしたことも，たしかであろう。そのほかの文化ももちろん普及される。15世紀に始まる輝かしいルネッサンスの時代が，こうして用意されたのである。ドイツのルター[1]が宗教改革を志して，キリスト教の聖書をドイツ語に訳したが，これが非常に普及したのも，印刷術の発達のおかげである。ルターの宗教改革の成功は，印刷機によるとさえいえるくらいである。

われわれにとって興味があるのは，学校の教科書が安くなったということである。これは，いうまでもなく，文化の向上のためには，非常にたいせつなことであった。書物は，一部の学者がひそかに持っている宝物から，学問に興味を持つ一般の人々の日々のかてになった。われわれはいま教科書や参考書の不足になやまされているが，われわれのこのなやみは，どうしても書物がほしいのだ，という欲求から生まれている。これも印刷術の発達によって，われわれ一般のものが知識と教養とを深めたためである。教科書がたやすく手にはいるようになってから，学校教育はどんなに発達したことであろう。人々の教養が高まることは，やがて一般の人々が，いろいろの点に目ざめる原因になる。

もちろん，それらは新しい印刷術の発明ということだけが，もたらした変化ではない。すぐに氣がつくのは，紙の製法が発達して，紙が自由にたやすく使えるようになったことである。紙は古代中國で，紀元前2世紀ごろから使われていた亜麻を原料とするものが，中世のヨーロッパに傳えられ，それがいっそう発達したのである。しかし紙の製法が印刷術の発達によって，また影響を受けて進歩したことも明らかである。人間の世界のことは，すべてが関係しあっている。一つの事がらの大きな変化は，次々とほかの部面に影響を與えて行く。

こうして，紙と文字は人間生活の必需品になった。人々はなんでも

(1) Martin Luther (1483——1546) ドイツの宗教家

紙に書きとめておきたくなって來た。紙に印刷されているものは，口傳えで知るものよりも信用されるようになった。やがて法律なども不文律（文字にあらわされない法律）から成文法となることが求められるようになる。新聞・紙上報告・定期刊行物，すべてが印刷された文字となって，日々のわれわれの生活に影響を與えている。このような技術の発達がなかったら，どうしてわれわれは廣い國じゅうのだいじなことがらや，世界の出來事を早く確実に知ることができるであろう。どうして，國じゅうの遠く離れて住む人々が結びあうことができるであろう。書物による教養が深められなかったら，どうして人々は自由を求め，積極的に自己の生活をうちたてて，國の政治や経済や文化の活動に進んでたずさわろうとする意志を持つことができたであろう。

われわれの生活は印刷術の発達によって，たしかに変わったのである。印刷術がはるかに遠くまで思想を傳えるようになったからである。もちろん，あなたがたは印刷術だけがこのような変化を人間生活に與えたと考えてはいけない。そのほかの技術の発達も，同じように人間生活の変化の原因になっている。われわれは，印刷術という技術の一部門でさえも，どれだけ多くの影響を與えたかを見ただけである。

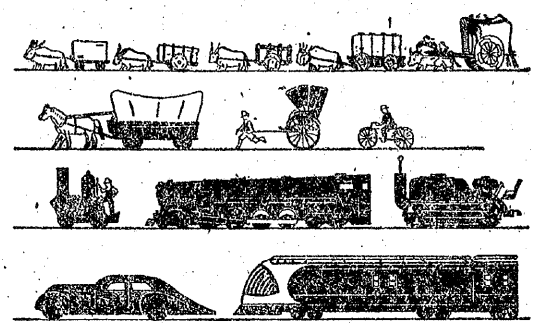
Ⅲ　新しい原動機が新しい社会をつくり出した

(1)　原動機に対するあこがれ

昔の船の絵を見ると，かなり大きな船を大勢のこぎ手が「かい」をそろえてこいでいる姿が描かれている。その労働のはげしさを思うと，昔の人が生活のために，どんなにきびしい努力をしていたかを感じないではいられない。われわれは，そこに人間らしくない惨酷なものをさえ感ずる。蒸氣機関やジーゼル機関で走る今の船は，ある程度，人間をひどい労働から救っている。人間は，自分のからだをはげしく使わないで，大きな力をどこからか生み出そうという夢を長い間抱き続

けて來た。不思議な力を使う魔法使の物語はどこの國にもある。

まず，車の発明は，人間の世界における大きな出來事であった。また，人間は馬や牛に助けを求めた。このおとなしい動物は，ある程度の満足を人間に與えてくれた。車を引き，耕作をし，また水あげ車をまわすなど，人間の労働を軽くしてくれた。さらに流れる水の力，はげしく吹く風の力に氣づいた人間は，この力を水車や風車でとらへることを発明した。農村にまわる水車，海辺に美しいおもむきを添えている風車は，古い時代の牧歌をわれわれの耳に聞かせてくれるように思われる。しかし，それは，人間のはげしい労働にかわって，世の中の要求する製粉，その他の仕事をし続けている原動機である。水車や風車は，工場の機械の動力に用いられ，アークライトが紡績機の動力に水車を利用したことは前に述べた。



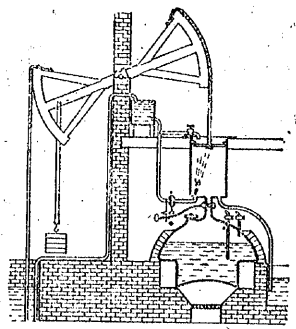
車の発達

しかし，風車は風のあるなしに左右されて，一定の平均した仕事を期待することができない。水力も，適当な川のないところでは，それを利用することができないから，都会で水力を用いる工場を作るのには不便がある。新しい動力の源になるものはなかろうか。商業が発達し，貿易が盛んになり，製品を大量に要求する社会が，生産力を増すことに大きな期待をかけたのは当然である。それは17世紀から18世紀に，商工業の高度の発達を見たヨーロッパ，特にイギリスの要求であった。

（2） ジェームズ＝ワットの時代

蒸氣機関といえば，ジェームズ＝ワット[1]を思い出す，それほど，蒸氣機関の発明の歴史におけるワットの功績は大きい。しかし，あなたがたは，人間の仕事は過去の遺産を受けついで，これを豊かに発展させて行くところに生まれるということを忘れてはならない。ワットは偉大であった。けれども，ワットの仕事が生まれるまで，どれほどその先人が苦しい労力と経験とを重ねて來たかを知るのは，たいせつなことである。シリンダの中の水を加熱して蒸氣を作り，その圧力によってピストンを持ちあげ，こんどはそれを冷やして，シリンダの中の蒸氣の圧力をへらし，大氣の圧力でピストンをさげるという機関を考案したのは，ドニ＝パパンである。

サヴァリ[2]とニューコメン[3]の蒸氣機関は，ついに実際に用いられるようになった。サヴァリは坑夫であり，ニューコメンはかじ屋であった。ふたりとも鉱山の排水をするポンプを動かすために，蒸氣機関の発明に努力したのである。それはパパンの発明したものと原理は同じであった。シリンダの中に蒸氣を入れて，その圧力でピストンをあげ，次に別のタンクから冷水をシリンダに吹きこんで蒸氣を凝結させ，ピストンの下のシリンダの内部の圧力をさげる。ピストンにかかる大氣の圧力で，ピストンがさがる，という順序である。



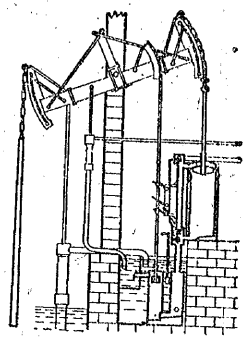
ニューコメンの大氣圧機関

（1） James Watt (1736——1819) イギリスの機械技術者．蒸氣機関の改良者

（2） Thomas Savery (1650——1715) イギリス人ニューコメンと協力した蒸氣機関発明者の一人

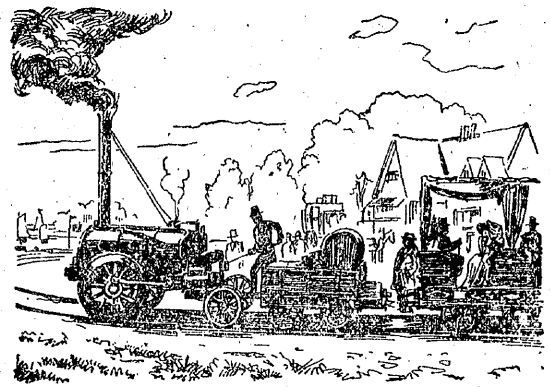
（3） Thomas Newcomen (1667——1729) イギリスの蒸氣機関発明者

しかし，これには大きい欠点がある。それは蒸氣を入れてシリンダの圧力を高めるのには，シリンダが蒸氣と同じように暖まっていることが必要なのに，それを，冷やすことは，非常に不経済だ，ということである。したがって燃料が多くいる。もう一つ，それは上下運動しかできないという欠点があった。そこでニューコメンの機械は炭鉱の排水ポンプにしか用いられなかったのである。



ワットの最初の蒸氣機關

ワットはニューコメンの機関の欠点をとりのぞいて，蒸氣機関をもっと完全なものにするために努力をかたむけた。その結果は，現在の蒸氣機関と原理の上では違いのない效率のよい原動機が誕生した。それは，膨脹した蒸氣を凝結器に導き入れ，そこでシリンダを冷やさないでもよいようにくふうされている。さらにワットは，ピストンの両側から蒸氣が交互に入る複動蒸氣機関を完成した。それによって燃料が非常に節約された。ワットの機関の効率はニューコメンのものよ



最初の鉄道

蒸氣機関の発明年表

年代	発明・発見の事項	参考事項
1550	カルダーノ眞空をつくることを提案	
		ガリレイ(1564—1642)
		17世紀のはじめオランダ商業の勝利 デカルト(1596—1650)
1643	ヴィヴィアーニとトリチェリによる眞空の実験	パスカル(1623—1662) ニュートン(1642—1727)
1654	ゲーリケの空氣ポンプの発明	ライプニッツ(1646—1716) オランダの商業がイギリスの進出によっておとろえはじめる
1658	パスカルの大氣圧の研究	イギリスのクロムウエルの民主主義革命(1642—1688)
1662	ボイルの法則の発見	
1695	ドニ＝パパンのピストン附の蒸氣機関の発明	ルソー(1712—1778) アダム＝スミス(1723—1790)
1712	サヴァリ揚水機関の製作 このころニューコメン大氣圧機関を製作	
1765	ワット凝結器分離の実験	アークライトの水力利用紡績機械(1768) アメリカの独立宣言(1776)
1781	ワット複動機関の発明	カートライトの力織機の発明(1784) イギリスの産業革命進む(1770ころより) フランス革命・人權宣言(1789—) マルサス(1766—1834)
1807	フルトン実用的汽船の製作	○イギリスの金属工場にはじめて蒸氣機関が設置された(1782) ダーウィン(1809—1882)
1814	スティーヴンソン蒸氣機関車の試運轉に成功	○イギリスの綿紡績工場に蒸氣機関がはじめて設置された(1785) ナポレオン法典の完成(1804) イギリス最初の工場法(オウエン)(1819) マルクス(1818—1883) アメリカの奴れい解放運動はじまる(19世紀のはじめ)
1824	カルノー熱力学の法則の発見	○フランス，パリに最初の蒸氣船の進氷(1816) ○イギリス世界最初の鉄道(1825) フランス7月革命(1830) フランス2月革命(1848) イギリスの労働組合の誕生(1848) ○ペリー徳川幕府に蒸氣車をおくる(1854) アメリカ南北戦爭(1861—65) ロシアの農民解放(1861—) ○徳川幕府横須賀に造船所をつくる(1865) 明治元年(1868) ○新橋横浜間に日本最初の鉄道(1872)

り，いくら低く見ても数倍であった。また，それまでの機関が上下動の直線運動だけしかできなかったものが，直線運動を回轉運動になおすクランクの裝置も應用された。

蒸氣機関の発明と排水ポンプとは非常に関係がある。そこで，この発明には，ガリレイ[1]，トリチェリー[2]，パスカル[3]というような人々の氣圧に関する実驗や研究，その後の空氣と蒸氣の圧力に関する科学者たちの研究が，大きな役割をしている。この科学者たちの研究はポンプに関係して行われ，それが科学として発達し，それがまた技術の発達をうながしたことは，おもしろい。このような関係は，ほかの技術と科学の発達にも見られる。

ワットの発明は，蒸氣の性質についての科学的研究を勉強し，またそれまでにすでにあった発明のすべてを総合してこれを関係させ，新しい部分を附け加えたところに生まれた。ここには，科学の発展と技術の発展の間の密接な関係が手にとるように見える。このようにしてワットはその天才と努力によって，人類の生活に最も大きな変化を與えたひとりとなった。

この発明は，人々が待ちに待った新しい原動機を出現させたから，当時の企業家たちはむさぼるように，これを利用しはじめた。それは，紡績・製粉・鉱山・製鉄・印刷などに使われた。それが，どのくらい生産力を高めたかは，たとえば，手刷りの印刷機では，二千枚を刷るのに一日かかつたのに，当時の蒸氣印刷機によれば，二時間でこれを刷りあげたという事実からもわかるであろう。

---

(1) Galileo Galilei (1564——1642) イタリアの物理学者，天文学者，近世自然科学の祖といわれている。

(2) Evangelista Torricelli (1608——1647) イタリアの物理学者，数学者，ガリレイの門人

(3) Blaise Pascal (1623——1662) フランスの数学者，物理学者，哲学者

（3） その影響

人間はついに原動機によって，人間のからだの力では及びもつかない力を利用することができるようになった。長い間の夢が実現した。しかし，その夢は新しい現実を作り上げた。企業家たちは，大量に安い製品を作るために，爭って蒸氣機関を利用した。新しい原動機は，さらに能率の高い作業機を求めた。この二つを組み合わせた工場制生産の組織は，いよいよその威力を発揮した。製品は大量に安くできる。よく賣れる。大工場は，多数の労働者をやとい，ますます安く大量に製品を生産して，利益をあげようとする。

これまでの家内工業や小規模な工場で行われていた産業組織は，次第に圧迫されて來た。金を持った企業家は工場と機械とに投資し，多くの原料を一度に安く買い求め，いよいよ利益をあげることになる。家内工業や小規模な工場の持ち主やそこで働いていた人々は，多くは財産を失ったり，働き口を失って，大工場の労働者になったのである。このようにして古い生産組織は次第にくずれて，近代の資本主義の生産様式の姿がはっきりと浮かびあがって來た。

機械の発達によって，たしかに，人々は多くの点でその恩惠に浴してはいる。近代的な便利な製品は自由に買える。生活は豊かになる。交通機関の発達は快い，しかも遠い旅をさせてくれる。しかし，人間の労働を機械によってかわらせることを夢みた発明家たちの意志に反して，発明を直接に利用する人々は，多く利益を考えた。だから，発明家の思いもかけない人間の世界の変化が起って來たのである。

新しい機械は生産技術に熟練するのをやさしくしたから，必要な労働者はどこででもすぐに得られる。製品を安く作ろうとすれば，婦人でも子供でも，男や大人よりも安い賃金で使うことができる。長い労働時間，低い賃金，悪い労働條件のもとで，労働者たちは機械の番人という単調な仕事をする。いわゆる産業革命の影響は，このようにし

て人間の生活に，多くの変化と問題とをもたらした。

Ⅳ　社会の新しい要求が発明・発見をよびおこす

わが國は，木版印刷では古い歴史とすぐれた技術を持っている。江戸時代の版画は世界に誇ることができるほど美しい。活字もかなり古いころからあった。グーテンベルクの発明より５０年ほど前に，朝鮮で活字が作られた。それによって印刷された書物が，豊臣秀吉の朝鮮出征（1592年）のおり，わが國に傳えられた。「一字版」という名前で，わが國でも活版の書物が印刷されたといわれている。これは技術の点でも欠点の多いものであったらしい。それとは別に，その数年前に，キリスト教の宣教師によって，西洋の活版術が長崎・天草方面に傳えられている。しかし，わが國では，どれもその後発達せず，やはり，木版印刷が行われた。現在の活版術は，江戸時代の終りから明治のはじめにかけて，改めて輸入したものから発展している。便利なものがなぜ盛んにならず，あとからもう一度輸入されなくてはならなかったのであろうか。つまり，当時の日本の社会がそれを要求しなかったからである。

ヨーロッパでは，中世の終りに，交通が盛んになり，商業が発達し，商人の間に，支拂や貸借などに必要な文書が要求されていた。また一方では，航海の発達に影響されて，地理・歴史の調査記録が求められ，それとともに，技術的，科学的な知識の必要もましていた。当時の進んだ人々や豊かな商人たちは，それを筆写してまにあわせていた。さらに，１４世紀には，ヨーロッパの各地に大学がたてられ，そこでいろいろな資料を，集めるようになった。しかし，筆写では写し違いが多く，読みにくく，不便であった。このような時に，印刷術が発明されたのであるから，むしろ，社会の必要がそれを生み出したといえる。

蒸氣機関の発明にも同じような條件がある。１８世紀のイギリスで

は，すでに手工業も工場制になっていて，生産もかなり大量にされていた。それにつれて，逆にまた，一般の人々の製品に対する要求が強くなった。イギリスでは，当時すでに殖民地が多く，需要はますますふえる一方であった。ついに手工業では，どんなに工場を大きくし，組織的にやっても，生産が需要に追いつかなくなった。生産力をまそうとする要求は，当然起ってくる。また一方では，分業が盛んに行われて，生産の能率をあげていた。分業はひとりで何もかもやるよりも，一つのことに集中するから，仕事に対する熟練も早く，能率がよい。そこで，個々の仕事は，簡單な機械的なものになるから，くふうを加えれば，次第に機械を利用して，いっそう能率をあげることができる。紡績工業は，当時では分業が最も進んでいたから，よく機械化されていた。そこで，さらに能率をあげるために，新しい原動機の必要が感じられたのである。

社会の要求によって生まれた機械は，大工場・大会社・大銀行・大百貨店を作り出した。さらにいっそうすぐれた原動機が求められる。能率のよい作業機が生まれる。機械を作る工作機械も進歩する。あなたがたは，明治以後のわが國の工業の発達から，身近にそれを理解することができる。

生産力が増せば，やがて生産が需要を追いこす。製品の値段がさがる。そのために，労働者の雇い主は，その賃金をさげようとする。あるいは，仕事をひかえようとして労働者を解雇する。機械によって次第にとってかわられた失業者が，さらにふえる。労働問題がはげしくなる。一方では，工業の盛んな國は，やすく原料を手に入れようとしたり，製品を賣るために，市場を得ようとして，國々の間に争いも起る。

これらは，すべて産業の発展がつくり出した社会の問題である。そこに，社会の新しい要求が生まれて來た。それは，経済や政治や社会

の問題を，科学的に理性的に解決しようとする要求である。社会の害悪を予防したり，対策を考えて，これを救おうとする科学者が生まれる。経済・政治・社会などについての科学が，こうして19世紀から20世紀にかけて盛んになった。

じっさい発明は社会の新しい要求をつくり出し，それらが互に影響しあうのである。電信が発明されると，人々は，電流で声を送りたいという要求を持つようになった。そこで電話が発明された。無線電信の発明が，さらに社会の要求をうながして，ラジオの発明となった。また，電流で声を送ることができるなら，写眞だって送れるであろうと考えられた。そして電送写眞が出現した。すでに無線の電話であるラジオが発明されたのに，どうしてわれわれは，無線の電送写眞を要求することができないことがあろうか。今では，テレヴィジョンが実用になっている國もある。

機械は，技術と科学の進歩によって，ますます発達するであろう。人間が，それによって，不合理な，はげしい労働から解放され，生産力を増し，生活を豊かにし，余暇を十分に利用して，文化の向上をはかるのは，人間生活にとって必要である。しかし，そのためには，人間がいっそう理性的になり，すべての人々が共同の福祉を思って努力することが，たいせつな條件になる。

研究すべき事項

問1. 手でなわをなうのと，機械でする場合との能率を比較すること。製品についての優劣はどうか。他の機械についてもできるだけ調べること。

問2. 近所に印刷工場があれば，そこで，印刷工程を研究すること。

問3. 他國の農業の機械化について研究すること。われわれの農村の機械化の程度を調べ，機械化された農業，たとえば，合衆國の農業における一人当たりの收穫高と，わが國の農業の一人当たりの收穫高を比較してみること。なぜわが國の農業は，機械化がおくれているのであろうか。その原因について研究すること。

問4. 自分の郷土の工場で用いられている動力源について調べること。それは，いつごろから用いられるようになったか。工場は，どういう動機でいつできたか。

問5. 博物館や，地方の郷土研究家などをたずね，石器時代に作られたものや，その他の遺物を見せてもらうこと。

問6. 自分の地方の飲料水を得る方法を調査すること。井戸ならば水のくみ方をいろいろ調べて図に描いてみること。水力の利用法を調べること。

問7. 衣食住と機械の発達とは，どういう関係があるかを研究すること。たとえば，布地などがどう変わったか，建築材料で変わったものはないか。食糧の種類，利用法等について。交通機関の発達ということも忘れてはならない。

問8. ワット・エジソン・フォードや豊田佐吉・野口英世などの傳記を研究すること。

問9. 郷土の銀行や会社は，いつごろ出來たかを調べること。銀行や会社や工場や停車場などが出來てから，人々の生活には，どんな変化が起ったか。このような社会組織の発達の間には，どんな関係があるだろうか。郷土の人々にたずねたり，郷土誌を調べたりして，それを整理し，報告すること。

第三章　思想の表現と交換

I　ことばは重要な遺産である

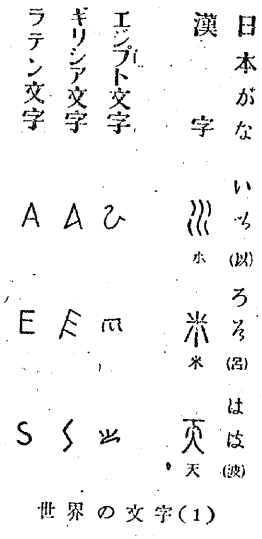
あなたがたは，学校で，正確なよいことばを，標準語として学習している。しかし，あなたがたの日常の生活には，きっと郷土のことばが用いられているに違いない。それは，標準語と似てはいるが，ずいぶん違うところもあろう。あらたまった場所では，あなたがたも標準語を使うけれども，親しい人たちの間では，郷土のことばの方が，自然であり，よく感情や意志を傳えることができることを感ずるであろう。しかし，もし鹿兒島の人と青森の人とが，おのおのの郷土のことばで話しあうとしたら，ほとんどその意味を互に理解することができないであろう。標準語は，一つの國の人々が，互に思想と感情とを傳えあい互に理解しあうためには，どうしても必要である。学校はそのために，國語を教科課程に取り入れている。

しかし，國民が学校で長い間標準語を学習しているのに，郷土のことばもまだなくならない。依然として，郷土の人々は，郷土のことばを，祖先のだいじな遺産として親しみを感じて話し続けている。それが，郷土の生活にぴったりしているからであろう。

われわれの標準語は，これからまだまだ育って行かなくてはならない。そのためには，いろいろな欠点を取り除くことがたいせつである。わが國のことばは，漢字を取り入れたために，漢字音の影響が非常に大きいので，例えば孝行・高校・航行・鉱坑・港口などコウコウと発音することばが，数えあげれば小さな辞書にも二十数種も出ている。これは文字に関係する事がらではあるが，やはり耳で聞くことばの問題でもある。とにかく，同じ音で違う意味のことばの多いのはなんと

いっても不便である。

ことばと文字とは同じもののように考えられているが，そうではない。ことばを持たない人間はないが，自分の文字を持たない種族は今でもある。文字は，ことばを表わす記号なのである。しかしまた，ことばというものを考える場合には，わが國では，漢字や，漢字から生まれた「かな」を離れることはできない。かな文字論者やローマ字論者の主張には，それぞれきくべき理由があるけれども，また反対者は，長い間，歴史的遺産として受けついで来た文字を改めるのには，いろいろな点でむりがあることを考えている。



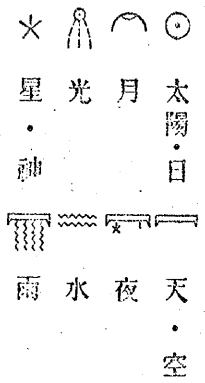
世界の文字(1)

とにかく，現在われわれの國語や國字で，いちばん問題になっているのは，漢字の数が非常に多いことである。ヨーロッパ・アメリカ諸國の用いているのは，26字のアルファベットであり，それはフェニキヤの文字から発展して，さらにギリシア・ローマを通って，今日の形になったものである。それは，漢字が一般に表意文字といわれているのに対して表音文字といわれ，一字一字には意味がないが，(1) それを組み合わせて語を書き表わすことができる。もちろん，必ずしも発音通りのつづりで書くとは限らないので，機械的に文字から語をつづることはできない。それでもたくさんの漢字，幾通りもの読み方のある漢字をいちいちおぼえるよりは，たやすくおぼえられる。漢字がむずかしいために，義務教育を受けただけの人たちが，新聞を自由に読むことができなかったり，一

(1)　われわれのかなも一種の表音文字である。

般の教養を高める多くの書物が読めなかったりする。書くことはさらにむずかしい。

これは，文化を発展させる上にさまたげになる。文字を学習するのに負担が重く，それに努力を取られるために，自由にくふうする精神が伸びないことも心配されるし，また一般の人々が新聞や書物から遠ざかっていては，國民すべてが，政治的，社会的な問題を理解して，積極的に自分たちの社会を向上させるために働くことができないことも心配である。



世界の文字（2）

新しい憲法が，やさしく，わかりやすい文章で書かれているのは深い意味を持っている。また，ふだん使う漢字の数や読み方を制限するために，新聞をはじめ社会の各方面で努力が拂われている。漢字ばかりが問題なのではない。「かな」を書く場合にも，やさしくする目的から，「かなづかい」の改善にも努力が要求される。

ことばは，自然に生まれ，自然に変化する。しかしそれはまた，人人の意識的な努力によって改善される。現代の文化の進んだ國には，このような意識的な努力がしばしば見られる。ことばもまた変化し発展する。郷土のことばでも，昔からあまり変わらないように思われるが，しかし年をとった人に聞けば，昔と今ではきっと変わっていることを認めるであろう。ことばは，遺産の中ではなかなか急に変わらないものの一つである。今でもわれわれは，話の中に昔のことばをずいぶん残している。しかしそれも，生活の変化とともに意味や使い方が違っている。変化するという点で，ことばも他の社会の遺産と少しも変わりはない。

II　ことばも歴史を持っている

ことばの変化の理由を簡単に明らかにすることはむずかしい。しかし，日本語について見ても，時代とともに変わっていることは，古典の中のことばと現代のことばを比較してみればよくわかる。奈良時代・平安時代・武家時代のことばが，それぞれの性格をはっきり示しているのも，社会生活の変化とともに，ことばの変わることを教えてくれる。しかし，文字に表わされて残ったことばは，その時代の各地方で話されていたことばのすべてではない。それは教養のある人たちの間で用いられていたことばであり，一般の人々は，今よりももっと地方によって違ったことばを使っていたであろう。さらに，昔のことばは，地方によって異なっていた以上に，社会や階級によっても違っていたであろう。江戸時代の武士のことばと町人のことばとは，かなり違っていた。それらが，いろいろな原因によってまじりあって，ことばの変化が起り，次第に同じようなものになると考えられる。

いつたい，ことばはどうして人間に生まれて來たのだろうか。おそらく原始時代の人間が集團生活をしながら，簡単な道具をつくり，それによって協力して労働をしている間に，合図を必要としたところから生じたものであろう。集團に警戒を與える時の合図は，群生する動物にはよく見られる現象である。それは叫びのようなものであるが，おそらく人間にも，そのような叫びの合図は古くからあったであろう。古い原始人類には，その遺骨から見て，今日のわれわれのようなことばを，発する機能がないと考えられるものも見出だされている。おそらく，はじめには，人類のことばも，身ぶり，手ぶりであったに違いない。簡単な道具を用いる労働の組織は，それで十分であると思われるから。今でも，お互のことばの通じない違った種族の間で，身ぶり・手ぶりで巧みに語る人たちがいる。われわれも，自分で意識するより，よほ

ど多く身ぶり・手ぶりを用いることは，よく注意するとすぐわかる。

道具の用い方が進歩し，分業が幾分進むと，やがてどうしても，仕事の連絡をとる上に，音声語といわれることばが必要になる。なお，手ぶりや身ぶりは，夜では見えないという不便もあった。ことばは，簡単な音声から始まり，やがてそれが次第に明りょうになり，一語一語がはっきりして來る。この要求による発声の努力が，脳髄や筋肉や骨の発達をうながして発声器官が発達することになる。音声語の出現とともに，人類には知性のあけぼのが訪れたのである。

ことばは，知能と平行して発達する。ことばは外に現われた思考であり，思考は声に出ないことばである。このことばの発達が，どれほど人間の進歩を早めたことであろう。先人は，自分の経験をことばによって子孫に傳え，子孫は，ことばを通じて先人の経験のすべてを受けつぐことができる。動物心理学者の実験によると，人間の幼兒とチンパンジーの幼兒の知能の発達は，はじめのうちはむしろチンパンジーの方が早いが，人間の幼兒がことばを理解し，ことばを話すようになると，全くおどろくほどの進歩が見られて，チンパンジーを引きはなしてしまうということである。頭脳と発声器官にめぐまれている人間は，言語発声の生理的能力を持たないチンパンジーと，知能の点で比較にならない違いを持っている。人間だけが，社会の遺産を子孫に傳えることができる。

はじめ，人間の生活が單純であったころは，どこの人間の集團生活でも，同じようなことばが用いられていたに違いない。しかし，生活が複雜になり，地理的環境や歴史的條件の違いによって，次第にそれぞれ固有のことばが発達する。しかし一方では，人間の集團がだんだん大きくなり，集團と集團との間の交渉が起るようになると，ことばも統一されたり，影響を受けたりして，同じことばの使われる範囲が大きくなって來たのであろう。

文字の発明は，いっそうそれをうながしたに違いない。ヨーロッパでは，先に述べた活字による印刷術の発明ののち，各國の文筆家たちは，一般の國民にわかることばで書くことにつとめた。そのために各國では，今までにすでに出來かかっていた民族語が，さらに標準語を求めるようになった。イタリアの標準語はダンテによって（1300年），イギリスの標準語はチョーサーたちによって（1380年），そうしてさらにおくれてドイツの標準語はルターの聖書によって（1520年），基礎をおかれたとウエルズはいっている。

このようにして，ほかの道具が複雜に，美しく発展したと同じように，ことばも，文字の使用が進むとともに，次第に複雜に，正確に，美しくみがかれて來た。繊細な感情，複雜な意志，正確な論理も表現されるようになった。それには，人々の意識的な努力もあったろうが，他民族や他の社会の人々との接触が，たいせつな條件になっている。わが國のことばの文化の花が，はじめて咲き誇った奈良時代の前には，すでに大陸との交渉によって，漢字の輸入があった。寺田寅彦（とらひこ）博士は，「日本人が眞に日本の土の中から生まれ，日本の言語が全く独立に発生したと考えるのは，ぼうふらが水から発生すると考えるよりもいっそう非科学的である。」といっている。古くは，多くの種族のことばの融合と接触の中に生長し，大陸の文字と文化の影響を受け，近くはまた欧米文化の影響を受けて，われわれのことばは今日の日本語に成長した。

Ⅲ　日本語を育てよう

われわれは，日本語をもっとよくしたい。それには，先に見たような欠点をなおすことがだいじになる。ことばは，祖先から受けついで來たわれわれの遺産なのである。これをだいじに育てるのは，われわれの責任である。ことばが，社会生活の変化につれて発展し変化するという事実をよく考えた上で，よいことばとはどういうものかを考え

なくては，ことばの改良はできない。

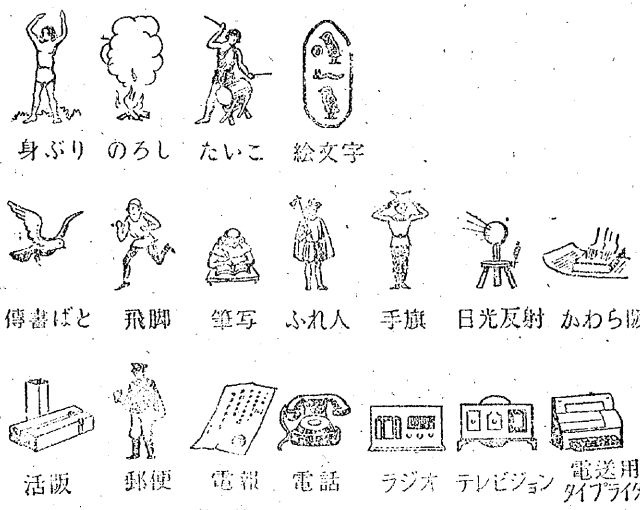
よいことば，美しいことばといわれるものも，時代や社会とともに変わる。平安時代のみやびな文章，鎌倉時代の簡潔なことば，江戸時代の漢文調は，それぞれ貴族や，鎌倉武士や，江戸時代の武士の生活から生まれた美しいことばだったのである。しかし，現代は，現代の人人の経済的，政治的，社会的な生活の要求から，現代の美しいことばが生まれなくてはならない。それは，社会生活の要求をみたし，そうして，日本の文化を高めるのに役立つようなことばでなくてはならない。

わが國には，まだ古い時代のならわしが残っていて，人々の社会的地位によって，ことばのいいまわしや使い方が違うから，なかなか複雑である。知識のある人たちのことばと一般の人々のことばの間の違いも大きい。よい日本語は，すべての日本人の生活に根をおろしていて，しかも，どんな地位の人々にも共通に使われるようなものでなくてはならない。そういう日本語に育つためには，日常話していることばと文章に書かれることばが，同じようなものになることが必要であろう。そうして，やさしいことばで，程度の高いことも表わせるようにならなければ，日本語は現在の要求をみたすことができないであろう。そのほか，文字をできるだけやさしくするとか，書き方も，縦がきと横がきのどちらがよいかを研究して統一するように考えることもだいじである。

われわれの祖先の生活とともに生き続けて來た日本語は，これから世界的な文化の交流の中で大きく発達することであろう。國語の発展にとって，詩人が大きな役割を演じたことは，世界の歴史にも見られるが，しかし，そのような天才が出るまでに多くの人々の意識的な努力が，積み重ねられていることも事実である。人々がなげやりにことばを使わず，正しいことばを用いようとする努力を続けて行けば，日本語は，さらに美しいことばになるに違いない。

Ⅳ　思想は次第に遠く早く傳えられるようになった

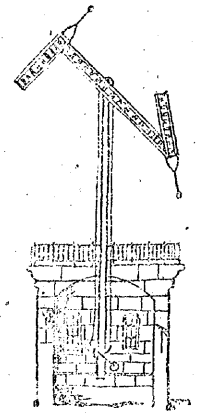
朝夕の新聞賣場には，人々が列をなして新聞を買い求めている。電光ニュースの前では，人々がおおぜい集まって光の明滅を見あげている。あなたがたは，新しい事件を耳にすると，学級のものたちに話したいと思う。また級友は，目を輝かせてあなたがたの新しい事件に耳を傾ける。このように人間は，自分の知っている事件や自分の考えを多くの人々に傳えたいという欲求を持ち，また自分の知らない事件について知りたいという要求を持っている。新聞やラジオは，そのような人間の欲求から生まれて発達して來た。このような欲求は單なる好奇心ではない。やはりそれは，いろいろな事件や経験を傳えることによって，人々とともにそれに対する判断をつくり，一定の態度を定めようとしたり，またそれを見たり聞いたりして，自分の経験をひろめ，自分の生活上の態度を定めようとする必要から生まれたのである。犬



傳達方法の変遷

やさるが未知のものに対して示す好奇心も，それが，かれらの生活に，自然な警戒の手段になっているように，人間のこのような好奇心も，結局は生活に適合しなければならないという必要をみたすはたらきをする。

事件を遠く早く傳える方法には，身ぶりや音(人間の声をも合めて)や光や煙などを用いる。身ぶりは，きっと，いちばん古くからあるものであろうが，現在でも手旗信号にそのなごりをとどめている。しかし，これはあまり遠くでは見えないし，夜は用をなさない。人の声もあまり遠くまでは届かないが，あまり遠くない範囲に傳えるために，太鼓などの音も古くから用いられている。やがて鐘も用いられるようになったが，これも距離の点では不満足だったであろう。今でもサイレンはその用をしているし，機械化されたものでは，モース信号などもそれであろう。光はもっと遠くまで届く。古代ギリシア人がトロヤ戦争の勝利を傳えるために，のろしを峯から峯へ次々とあげた話は，ギリシア悲劇にも出て来る。わが國でも，のろしがいろいろの合図に用いられたことは，昔の書物によって明らかである。今でも発火信号や発煙信号は，その方法を用いているわけである。


シャップ
(旧型信号機)

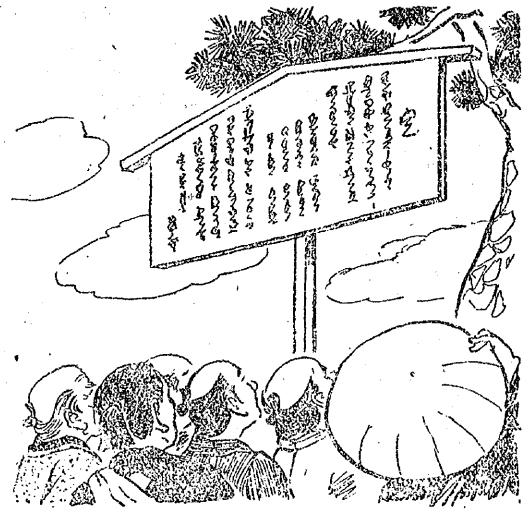
以上のような合図の方法は，複雑な事件の内容や思想を早く傳えることはできない。そこで，どうしても人間が早く目的地に着いて，自分のことばで語ったり，文書を傳達する必要が起る。またギリシア軍がマラソンの野にペルシア軍を破った報を，祖國アテネに走り傳えた飛脚の話は有名であり，今日のマラソン競争にその名を残している。飛脚は，馬やかごを用いたり，自分の足で走ったりするものである。これはやがて，郵便にと

ってかわられた。わが國では，明治3年（1870年）から，政府の仕事として郵便事務が行われている。

電氣科学の発達によるモースの電信の発明，ベルの電話機の発明，さらにマルコーニの無線電信やその後のラジオの発明は，次第に世界の距離を縮めるようになった。それは，世界の國々の人々の生活を，ますます強く結びつける。人々は，その生活が，國や世界の事件によって影響を受けることを知って，それを知って自分の態度を決めようとするようになる。戦前には，日本のいなかで，蚕を飼う人の中には，ニューヨークのウォール街の絹の相場を熱心に新聞で読んでいた人もあった。

V　人々はどうして自由に意見を交換しているか

社会が一つの社会として成り立つためには，社会の人々が互に理解しあうことがたいせつである。新しく制定された法律や経済対策などについては，社会の人々が，これに対して知識と理解とを持たなくては，日常の生活は


高札の図

正しく営まれない。また社会の出来事は，政治や政策とも関係を持っているのだから，それについていろいろのことを知るのは，政治に対する批判に人々が協力して，よい社会をつくるのに必要なことである。

古代の社会でも，そういう目的のために，石や板に，人々に告げる必要のある事がらを記して交通の要所に掲げたり，あるいは，人がそれを世間にふれ歩いたりした。江戸時代まであった「高札」は，幕府や藩の命令を傳えたものである。今でも，街に見られる看板は，人々に自分の職業について知らせ，人々の要求にこたえているのである。あなたがたも，知らないところで薬を買おうと思えば，まず薬屋の看板を探すであろう。

現在では，このような公表の機関として新聞があり，それは報道の自由をその使命としている。

ところが，どんな社会でも報道が自由であるとは限らない。民衆の意志から離れて，一部の人々のためにだけ，政治の行われている國や社会では，報道の自由は存在しない。その政府に都合の悪いことは報道を禁じられる。その結果は，國民や社会の人々が，社会の動きの眞相から遠ざかって，批判力や正しい判断の力を失ってしまう。人々の知ろうとする要求は非常に強いから，ある事がらは，決してかくしきれるものではない。江戸時代には，「落首」というものがあって，幕府が隠していることを暴露したり，幕府の政策をふうししたりすることが行われた。專制的な社会では，「流言」や「うわさ」が，隠された眞相をゆがめて人々の耳から耳へ傳えて行く。しかしそれは，不健全であって，決して眞相を社会の人々に傳えるものではない。そのような社会は，いつも暗いかげを持つことになる。

「報道の自由」はこのようにたいせつであるが，報道はさらに早く，正確なほどよい。新聞もラジオもその要求によって生まれて來たのである。報道を知りたいという要求は，江戸時代には，瓦版という新聞

の原型を生み出していた。江戸の末期の「読賣瓦版」は，今でも新聞名にそのなごりをとどめている。わが國の日刊新聞は，明治3年（1870年）の「横浜毎日新聞」が最初のものといわれている。そののち新聞の発達は，印刷術・製紙法・通信機関の発達にともなって急速に進み，それがまた，人々の報道の早さ，正確さを求める心を逆に強めたのである。

現在の大新聞は，一般的な記事や，経済界の記事，政治的記事・文藝・スポーツなどの欄と，社説および解説的な論文などの欄を持っている。さらにそれぞれの部門に專門化した新聞もある。その記事をつくるには，通信員や特派員を用いて國内の各地から情報を集める。大新聞になれば，海外に特派員をおいたり，あるいは外國の大きな通信社と特別の契約を結んで，海外のニュースを早く集める。新聞の記事の新鮮さは，速度を好む現代人の要求にかなうように，電信・電話・無線電信・航空機等を用いてその効果をあげ，さらに紙面も写眞や絵によって絶えず人々の心をとらえるくふうをこらしている。

ラジオは，新聞が「書かれた文字」であるのに対して，「語られたことば」をもっていっそう大きな効果をねらう。声による傳達機関は，その古さにおいてもいっそう古く，「ふれ」はそのひとつである。ローマ時代には，フォーラム[1]といわれる市場が，おもな都市には存在していた。そこは品物を賣買するところであったが，そのために集まる人々は，そこで自然に，いろいろ語りあうようになった。町の商人や家庭の婦人，農民や役人，軍人などが，同じ町の住人として，政治や財政や教育などのことについて討議を行うようになったのである。人々は新しい事件や他人の意見を知る機会をフォーラムに見出だし，やがてフォーラムはその機能を意識して，目新しい記事を書いた掲示板を立てるようになる。人々は好んでここに集まる。人々は皇帝の禁令や

（1） forum，今でもこの名まえで大衆討議が行われている。

奨励や，元老院で可決した法律などについても納得する。これはローマ帝國のためにたいへん役に立ったものである。

人々は現在でもいろいろの集会を持って，そこで意見を述べあい，世論をつくる。しかし，それでは人々の範囲もまた数も限られている。ラジオはこれを限りなくひろめてしまった。現代のわれわれは，ラジオの放送によって，みんなが関心を持つ大きな世界の中に生きていることを感ずるようになった。

新聞やラジオは「社会の公器」である。それを人々は自由に見，聞くことができるが，一般の人々は，そこに意見を発表する機会にはあまり恵まれていない。近ごろは新聞の「投書欄」やラジオの「街頭録音」は，これを一般の人々に解放しようとする意図から行われている。しかし，一般の人々は，むしろ新聞やラジオによって自分の意見をつくることの方が多い。新聞やラジオは，その使命からいって，報道の正確さを失ってはならない。しかし，新聞の意見の執筆者，ラジオの放送者はすべて一定の立場にある人々だから，その意見は片よることもある。また，報道は正確を心がけているであろうが，速度を要求するために，しばしば誤りもある。そこで一般の人々は眞相を知り，自分の意見を正しく立てるためには，批判的な精神をもって，選択を行うことがたいせつになる。読者や聴取者の批判は次第に新聞やラジオの意見や報道を逆に向上させるであろう。このようにしてわれわれは正しい世論を新聞やラジオに反映させる道を持っている。

研究すべき事項

問1. 内閣で制定した「当用漢字」と「現代かなづかい」を研究すること。それについて学級で討議すること。

問2. もし外國語をならっているならば，そのことばと日本語の性質で似ているところ，違っているところをできるだけ調べてみること。

問3. できるだけ正確に思想を発表する表現方法について研究すること，討論会をやるのもよい。

問4. 自分の地方や，自分たちの日常使うことばで，不正確なもの，よくないことばを集めて学級で発表すること。それは改めることができるであろうか。

問5. 正しいことばを正しく発音するための練習会を設けること。どういう方法でその目的を達することができるであろうか。

問6. 自分の地方の人々の月ぎめに読んでいる新聞や雑誌の調査を行うこと。どのような新聞や雑誌が一番よく読まれているか。なぜだろうか。

問7. 自分の地方の新聞社，できればラジオ放送局を見学し，共同でくわしい見学記をまとめること。記事はどうして集められるか。

問8. 同一の事件や政策について，種々の新聞は同じ報道をしているか，比較検討すること。同一の問題に対して種々の新聞はどのような社説をのせているか。なぜそのような差が起るか。

問9. 自分の郷土にある公告機関について研究すること。それぞれの目的を明らかにすること。

第四章　生活の規則と様式

I　社会の制度はどういう意味を持っているか

学校では，少年少女が一つの教室でいっしょに学習をするようになった。女性は参政権を得て，全く男性と同じ政治的な権利を保証された。あなたがたは，これを時代の大きな変化と考えないだろうか。人間としての價値では，男性と女性には，もともとなんの違いもあるはずはなかった。それなのに，なぜ今までいろいろな差別待遇があったのかを，あなたがたは考えてみたことがあるだろうか。

江戸時代には，男女の差別待遇があったばかりではない。あらゆる人々の間に身分の違いがあって，そこに差別待遇が行われていた。家では家長を最高にして，家族には，長男から始まってその順位がきまっていた。今でも佛事の焼香の順はそういう風習をとどめている。昔は，それは，そむくことのできないおきてのようなものであった。それにそむけば，今よりもいっそう人々に非難された。家と家との間にも順位があった。身分は生まれながらにしてきまっていた。武士の家に生まれた男子は生まれながら武士であり，農家に生まれたものは一生農民であった。領主のもとに，士・農・工・商というように，身分の順位があって，よほどのことがない限り，その身分には変化がなかった。わが國とヨーロッパとはかなり違うところがあるが，ヨーロッパでも中世では，王・領主・騎士・農民というような身分の秩序が，厳格に存在していた時代がある。

この制度を，当時の人々はあやしまなかった。あなたがたは今は職業を選ぶ自由を持っている。そうして自分の才能と欲求にしたがって，いちばん世の中と自分のためになる職業につくことがよいとされ

ている。しかし，昔はそうではなかった。身分相應ということが重んじられ，それに反すれば，世の中から非難された。職業と身分とは一つになっていて，人々は代々同じ職業についていたのである。このように，ある社会には，あるきまりがあって，集團生活を保ってゆくようにできている。そのきまりは，人々に動かないものと認められ，人々はそれにそむくことができない。これをわれわれは社会の制度といっている。人間の集團生活は，衣食住の要求をみたすために，生産や分配や消費をするのにつごうがよいように，おのずから人と人との関係を定める制度をつくり出す。このような制度はどんな社会にもあり，その社会の人々は，これに從って生産し，分配し，交際をし，消費する。つまり人々はその日常生活では，すべてそれに從わなくてはならない。それにそむくものは，その社会に生活することができないと考えられている。

鎌倉時代から江戸時代にかけては封建制度の時代とよばれている。封建制度では，領主が土地を領有していて，農民は領主とその臣下である武士に支配されて，その土地を耕作し，いろいろの形で租税をおさめる。領主と武士とは主從であり，武士は農民が領主におさめる租税から家ろくをもらって自分の家を立ててゆく。農民は領主の領民であって，家長を中心にして，代々領主の土地を耕作して領主につかえる。このように，封建の社会では，きちんとその身分の順位がきまっていたのである。封建時代では手工業や商業もやがて盛んになったが，はじめは農業と結びついて，わずかに行われていたにすぎず，農業がおもな産業であった。農民は，かってに農業を離れて，他の地方に移ることは許されなかった。さらに衣食住にもいろいろなおきてがあって，農民は身分不相應な家に住んではならないとか，着物は絹を着てはいけない，紫とか紅梅というような色のものはいけない，そでもあまり長くてはいけないというようなことさえもあった。

このように身分がきまっていたから，当時は武士の少年たちは，自分たちの仲間だけで集まった。農民の少年は別の仲間を作っていた。しかも少年の仲間の中にも，自然に家がらや格式によって順位があった。

現代に生活しているあなたがたは，こういう制度が，身分や家がらを重んじて，個人の自由や價値を認めないのをふつごうだと思うであろう。封建時代も末になると，このふつごうを感ずる人々が次第にまして來た。商業や工業が発達して，都会に生活するものが多くなり，きゅうくつな古い制度にあきたらない人々が出て來たからである。フランス革命の時に発せられた人権宣言には，そのはじめに，「人間は生まれながら，自由平等の権利を持っている。」ということばが掲げられている。それは人間が身分によって，一生の運命を定められているのは不合理である，人間はだれも同じ人間として，同等の自由と権利とを持たなくてはならない，ということを主張したものである。このような考えを抱く人々が多くなれば，この考えをおさえようとする古い制度は一つずつくずれて，それに引き続いて他の制度もくずれていく。はじめは古い制度にそむいた人は，いろいろな形で迫害を受けたが，そのような人々が多くなれば，かえって制度の方がくずれ出すのである。しかし，制度がなければ社会はなり立たない。新しい制度がそれにかわって生まれ，社会自身が新しい社会になる。

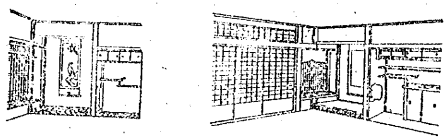
わが國の明治維新は，王政復古という形で行われたが，そこにはやはり，近代社会の進む方向に歩みをあわせて，四民平等の思想がはたらいている。近代的な政治・経済の制度が取り入れられ，士・農・工・商の身分がなくなり，武士の家ろくの制度が廃止され，税法が改められ，土地私有も許された。職業の自由も保証された。近代的な学校も出來，一般の少年少女たちは，ある程度自由に普通教育を受けられるようになった。しかしすべてが一度に改まったのではない。個人の基本的権利が十分に認められる制度は徐々にしか実現しなかった。25才

以上の男子が選挙権を持つことを定めた普通選挙法は，昭和3年（1928年）にはじめて行われ，女性の選挙権は昭和21年（1946年）にようやく認められたのである。

新しい制度は，個人に新しい義務と責任の意識が出來なくては，ほんとうに健全な制度として発展することはできない。それは新しい道徳を要求する。それが出來ない間は，社会生活は混乱を続けるし，新しい精神が人々の中に生まれなくては，新しい制度は形だけに終って，社会は秩序ある発展をとげることができない。あなたがたは現在そういう問題を持っている時代を経験しているのである。

II　社会の慣行は容易に変化しない。

われわれの家には，たいてい床の間のついた座敷がある。あなたがたは，あの床の間がどうしてできたのかを知っているだろうか。多くの人々はその理由を知らない。そこに絵をかけたり，花をいけたりしながら，はじめはどういう目的で床の間が出來たかを知ろうとしない。それにはいろいろの説がある。一説によると，平安時代の貴族が佛像を安置した場所が，次第に床の間になったといわれている。現在では，そこはあまり佛像とは関係がない。なかには床の間に本箱などを置く人もいる。



床の間の図

慣行というものは，たいていの場合，なんのためにそうしなくてはならないかが忘れられていながら，多くの人々はそれに従っている。床の間を作る，作らないは，現在のわれわれの生活にとって，たいした影響はないが，それでも人々はこれを捨ててしまはないで，だいじな場所としてそれを飾ることを忘れない。人々はふだんはそれをあや

しかもせず，あたりまえのことと思っている。しかし，そこに慣行や風習が社会生活にとってたいせつな意味もある。

社会の慣行はなかなか変わらない。明治のはじめ，新しい学校制度が出来ても，一般の人々は昔どおりの漢学塾や寺子屋に子どもを通わせていた。封建制度はくずれたが，今でもなお，わが國の全体にわたって，家族主義は慣行として行われている。身分制度は失われたのに，親分・子分の身分的な関係は，今でもいろいろの形で存続している。

慣行は，あまり外界と接触のない狭い社会ほど強く人々を支配している。昔の社会はそうであったから，他の社会の慣行をけいべつする風が強かった。隣り村の人々の風習をあざ笑い，自分たちの風習を一番よいものと思う傾向は，今でも所によっては見受けられる。これがこうじて，他國人の風習や慣行を軽べつの目で見るようであれば，自己の民族に対する，いわれない優越感が強くなる。それはよくないことである。

慣行は長い傳統を持ち，中には宗教的な起源を持つ古いものも多い。宗教的な意味を持っているために根強い慣行もある。村や町で人々が楽しみに待っている氏神のまつりは，はじめは神をまつる儀式が主であった。仕事を休んで奉仕するのは氏子の宗教的なつとめであったから，その日に仕事を休まないものは制裁を受けなくてはならなかった。次第にまつりの行事が盛んになると，かえって宗教的な意味がうすれて，レクリエーションの意味の方が強くなっている。「ぼんおどり」などは，宗教的な意味を離れても，農村のレクリエーションとして生き続けている。

慣行はなかなか変わらないが，しかしこれも，やはり他の社会の慣行との接触や文化の発展，制度の変化などに影響を受けて，少しずつ変わってゆく。その激しい時には，古い慣行と新しい要求や思想が衝

突する。人々は，そこではじめて自分たちの狭い社会の慣行のほかに，もっと違った，もっとすぐれた生活の仕方があることに氣がつき，自分たちがそうしなくてはならないと無意識に信じていたことが，單なるならわしにすぎないことを悟るようになる。都会では，そういう機会が多いので，比較的早く慣行が変わるが，農村では，それに反して慣行の変化がおそい。そこに都会と農村との対立も見られる。経済や政治や文化などの変化にしたがって，慣行が急に変わらなくてはならない時には，いろいろな問題が起る。古い慣行になじんでいるものは，新しい制度や進歩の方向を理解しない。新しいことを求めるものは，古いならわしをこわそうとしてあせる。この混乱は一時的であるにしても，社会生活にとって害になる。しかし，またそれは人々に，慣行も変わるべきものであることを教え，新しい健全な社会を建設するにはどうしたらよいかを考えさせる。社会の発展する時には，社会は，時々こういう激しい時代を経験する。

Ⅲ　われわれの衣食住についても慣行がある

「おまえはスフしか着てはいけない。」というような法律があったとすれば，あなたがたはおそらくおかしなことだと思うに違いない。しかし，前にもいったように，江戸時代にはそういうおきてがあった。農民は絹物を着てはならない，というのである。農民は麻や木綿のようなじょうぶなものを着るならわしであったから，それにそむくものはいけないとされ，時の領主もそれを美風を乱すものとして禁じるものがあったのである。ところがその木綿がわが國で一般に用いられるようになったのは，そんなに古いことではない。木綿の輸入は，かなり古くは中國や朝鮮から行われた。しかし，実際にわが國の各地で綿が盛んに作られたのは，江戸中期以後（18世紀以後）のことであろう。それまでは，絹は古くから上流の人々には用いられていたが，労働着

などは麻の着物だった。麻はじょうぶだし，ごつごつしているが，さらりとして，夏の濕氣の多い暑い日本の氣候には適していた。木綿は柔らかく，はだざわりがよく，保溫にもよい。しかし，それだけに，夏ははだについて暑くるしい。麻のすがすがしさを求めて，ついに日本人はのりの強いゆかた姿を作り出した。

木綿は労働着やふだん着にはその性質からいって，欠くことのできないものになった。質素な人々が木綿の着物を着る風習は，すいぶん長く続いたのである。「身分不相應な着物」に対する非難は，單にその人のぜいたくな経済生活を批評することばではなく，社会生活の秩序を乱すことに対する道德的な非難をも含んでいる。このような衣服における慣行もなかなか根强かった。

やがてわが國の社会生活は近代化して，西洋の文化の影響のもとにいわゆる洋服を着ることが多くなった。近代的職業と近代的な公共建築は，洋服とくつの生活を要求しているからである。羊毛が衣服の原料としてあらたにつけ加わったわけである。さらに羊毛の持つ彈力とか保溫力とかいう特色は，これを和服にも用いる原因になった。明治時代に，はじめて洋服を着たのは軍人や官吏であった。したがって洋服を着るものは，一般の人々から特別の目で見られた。そこにはまだ身分の観念が抜け切れなかったから，「洋服を着た官吏」は尊敬され，やがて洋服姿が尊敬されたのである。今では多くの人が洋服を着るので，そういうことはなくなったが，それでもなお，いなかなどでは，その氣風が残ってはいないであろうか。

戰時中のわが國は國際関係から孤立したから，綿の輸入が不可能になった。それで，あれほど國民生活に普及した木綿も新しいものを手に入れるのが困難になり，今では貴重品にさえなっている。それはもはや單に質素な材料ではなくなった。「スフ」が人工繊維として登場したが，なおいろいろの点で満足な結果を與えていない。木綿に対する

要求は変わらない。國際貿易が再び開かれれば，やがておそらく木綿は，われわれの衣服生活に昔の勢いを回復するであろう。それとも，スフがもっとすぐれたものになるであろうか。そうなれば，われわれの衣服の慣習もおそらく大きな変化を受けるであろう。

衣食住生活のならわしは，氣候や風土に影響されるのはもちろんである。そのほかそれは産業や制度や流行などによっても影響される。ならわしは社会の人々の生活に適したものとして，かなり長い間続く。しかし，氣候はほとんど変わらないにしても，その他のものは次第に変わるから，それにつれて衣食住の生活も徐々にではあるが，変わって行く。それが変わる時にはいろいろの問題が起る。たとえば，衣服の変化は，比較的容易であるとしても，住居の様式の変化はそれほど容易ではない。すると，その間に調和がとれず，いろいろなふつごうが起る。くつと塵の生活との関係はまことにわずらわしい。わが國の現在はそのようなふつごうが激しく起っている時代である。

Ⅳ　生活様式はいろいろな点で改善を要求されている

わが國の米の年産額と人口とをくらべると，とうてい國内だけでとれる米では足りないのは明らかである。そこで，主食の問題が人々によっていろいろと論じられている。やがて國外から米の輸入をすることができるとしても，日本人が依然として米を主食にするのは，これからもよいことであろうか。それとも他のものに変えるべきであろうか。

あなたがたは，日本人はすべて昔から米を主食にしていたと思っているであろうか。もし，そうだとすれば，それは正しくない。たしかに日本人は非常に古くから米を食べていたが，たいていの日本人が主食に米だけを食べるようになったのは，ごく最近のことである。今から五六十年ほど前にドイツ人のエッゲルトという人が調べたところによると，米は全國を平均して，全主食の51パーセント内外を占めてい

るにすぎないということであった。それ以前はさらに米の消費は少なかったであろう。江戸時代には輸送機関も発達していなかったから，産地でできた米は城下町や港町に回送されるにすぎなかった。米の産地でないところでは，いなかでも米は食べないし，米を作る農民も一般に米をあまりたべなかった。現在でも米を特別の場合にしかたべない地方がある。

もちろん，だれでも米をたべるようになったことは，生活水準があがったことと考えれば，喜ぶべきことである。身分の観念によって，主食の差をつけるのはよくないことである。しかし，現在は一般に米を主食とするならわしが出來た結果，主食の問題はいっそう深刻になっている。外米の輸入が米の消費量を増したことの一つの原因でもあるが，今後も外米にたよってまで米を主食とすべきかどうかは，いろいろの問題があろう。

なお，米を主食とするならわしは，その他の條件ともいっしょになって，主婦の台所の仕事を複雑にしている。主婦をもっと台所から解放するのは，主婦のためにも，社会のためにも必要である。主食の問題は，さらにいろいろの條件と考えあわせなくてはならない。米，特に白米の飯をたべ，副食物を考慮しなければ，その結果としてビタミンBの不足からかっけのような病氣をひき起す。主食にはその成分やカロリーと副食物のそれとの関係を考慮しなくてはならない。國民の生活水準や，わが國の耕作地の地形や氣候などをも考えなくてはならない。このような複雑な條件の中で，主食の問題を考える時，その解決や改善は容易でないことがわかる。しかし，われわれは，遠い昔から日本人の主食は米飯であったという考えが必ずしも正しくないということ，主食もまた変わるものだということを知っておくのは，たいせつなことであろう。

これは住居についても同じことである。われわれは壁の上に生活し

ている。疊は日本人の生活と切っても切れないものだと信じている人がいる。これもまた考えなおしてみる必要がある。たしかに，疊は古くからある。しかし，それは一部の人々に用いられていたものである。しかもその人々もすわるところとか，寝るところに用いたにすぎなかった。部屋全体に敷きつめるようになったのは都会では早いことであろうが，いなかではそんなに古いことではない。現在でも，農村では疊を敷きつめない部屋を多く用いているところがある。

疊はたしかに保温のためにはよいであろうが，乾けばほこりをたて，また濕氣を吸う点でも衛生的ではない。特に屋根の深い日あたりの悪い農家では，疊と木綿の寝具は病菌のよい温床にもなる。交通や工業や商業の発達につれて，農村の人々も移動が多くなり，結核菌のような病菌を農村に持ちこむようになってから，この問題が重大になって來たのである。疊は，現在ではわれわれの生活に親しいものとなり，これをやめるなどということは，いろいろの点からできないことのように見える。しかし，これも住居や衣服の慣行が変わって來た結果として起った両者の不つりあいから生じた問題なのだから，これに対する科学的な研究もまたたいせつである。これは何も米や疊に限ったことではない。

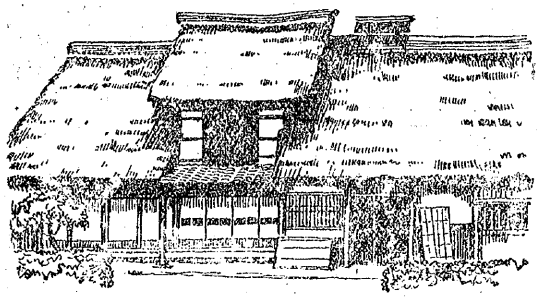
V　生活の傳統はどんな價値を持っているか

われわれが日常の生活で，ある行爲をしようと思う時，その行爲のしかたは，おのずから自分たちの社会のならわしやしきたりに従うのが普通である。われわれは家を建てる時に，どんなにくふうをこらしても，やはりその地方の今までの家の建て方をもとにして，それにくふうや改善を加える。全然新しく考えて，しきたりやならわしに関係のない家を建てるのは容易なことではない。いちいちの行爲にすべて新しくそのやり方を考えてやらなくてはならないとしたら，その困難

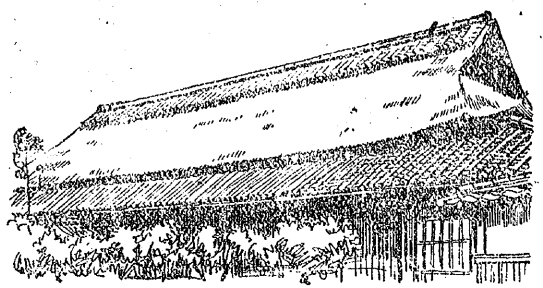
とわずらわしさは想像もできないほどであり，しかもわれわれは，まちがいをおかすことが非常に多くなる。社会はこのようなならわしやしきたりによって，その全体の生活が支えられているといってもよい。それはわれわれの祖先がこの歴史と風土の中で，長い間の努力によって，われわれの生活を少しずつ改善して來た経験の集まりである。家の屋根の傾き方一つにも，よく見ると祖先の苦心のあとが結晶しているのを知って驚くことがある。

その中には行動のしかたや感じ方や考え方なども含まれている。單に衣食住のことばかりでなく，人と人との関係や制度や，あるいは，文学や美術や音樂や信仰など，いろいろな方面にこの傳統的なものが存在している。一地方に特殊な傳統もあれば，またわが國全体に

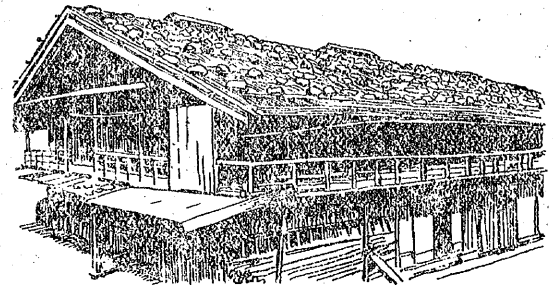
屋根の図（1）



屋根の図（2）



屋根の図（3）



屋根の図（4）

わたる傳統もある。

社会は傳統を重んじている。それは結局先人の経験と努力とを重んじ，また社会がそれによって結びあって來た見えない力を重んずるからである。わが國はいろいろな世界の文化の影響を受けながら，わが國自身の特殊な文化を生み出して來たのも，この地理的條件や社会的條件から生まれた傳統の力によるし，古い衣食住の形式が残っているのもその力のためである。

しかし，傳統は古いから，昔からあったから重んじられるのではない。昔はそうであった。昔の社会では，産業や交通の発達が遅かったから，その生活に変化が少なかったので，一般に古いしきたりに従っていれば，個人も社会もだいたい安全な生活が送れたからである。現代のように科学が進歩し，発明や発見によって生活様式が激しく変わる

時代では，もはや傳統は昔から續いて來たのだからという理由では，そのまま重んじられなくなった。人間は次第にその生活を意識的に計画的に考え，営んで行かなければならなくなって來た。そこで，傳統やしきたりに対しても，科学的に反省する必要が生じて來たのである。傳統が重んじられるのは，それが古いからではなく，積み重ねられた祖先の知恵と経験が，現在と將來のわれわれの生活に対して價値を持つと認められるからである。

このようにして，われわれは社会について科学的に研究し，合理的に社会の改善をはかるようになった。教育についても教育科学が発達した。教育は昔から行われていたが，昔は傳統に從って，それを疑わないで，そのままの方法で行われた。先生がやった通りを，また弟子に教えるのがよいとされていた。現在では，教育は何を，どうして教えるかということを科学的に研究し，社会の発展の方向に最も有効に教育活動が行われるように，教育心理学の研究が進み，それによって教育活動が行われるようになっている。新学制や新教育の方法もそういう意識的な努力のあらわれである。生活の規則や様式のすべてにわたって，人間はできるだけ意識的に改善しようとする努力がたいせつなことを次第に知って來たのである。外國のすぐれた制度や文化を，取り入れようとする努力もそこから生まれて來る。

しかし，社会は過去から續いて，そうして未來へ発展して行くものである。外國の社会がどんなによい社会であっても，それがよいからといって，いままでの自分の過去を断ち切って，外國の社会の形にまねて，全くあらたな社会生活を始めることはできない。そうすれば，その社会はおそらく，ばらばらにこわれてしまうことであろう。改善は，日本の社会の過去の制度や慣行や風習などの変化を研究し，それがどうしてそうなったかを理解して，現在の不合理を解決する道を見出だすことから生まれる。過去の中に未來の社会生活に必要なものを見出

だし，それに新しい生命を與えてゆくことが傳統を生かすことになる。いつも変化し，発展する合衆國の社会にも，文化遺産が受けつがれ，それが新しい意味を與えられているのを見るのは興味のあることである。

いつの時代でも，発展する社会は改善を要求している。しかも，現在の日本は最もそれを要求している。あなたがたは，郷土の生活の中に，政治上・経済上の制度や教育制度やまた産業上のことがらの変化によって，いろいろの生活の規則や様式の改善が要求されているのを知ることができよう。それらが，郷土の風習に反するといって，困難をかこつ人々も見受けられるであろう。工場が附近にできてから，郷土の風習が悪くなったという声もあろう。そのような困難は，ほとんど社会の全体に見られる現象である。しかし，それを自然の変化にまかせるのでなく，改善に轉ずる社会は，進歩の道を進む社会である。

研究すべき事項

問 1. 封建時代の青少年の地位について調べること。それを現在の青少年の集團の生活と比較すること。

問 2. 封建時代の女性の生活について調べること。どんな規則や道徳が女性について定められていたろうか。

問 3. 親分子分の関係はどんな形で残っているだろうか。郷土の生活の中から見出だして研究すること。

問 4. 明治から現在までの政治的・経済的な制度の変化を調べ年表を作ること。

問 5. 学校制度にはどんな変化があったろうか。なぜだろうか。江戸末期から現在までについて調べること。

問 6 衣服・くつ・身のまわり品の製造場を訪問し，その工程を詳しく調べて，手入れや修理について注意すべき点を明らかにすること。

ライ2ト50.3-1-13

問7. いろいろな場合における衣服の美と実用性という点について学級で討論会を開くこと。

問8. 日本の住宅について改善すべき点を研究すること。たとえば，寝室・居間・台所・便所などについて，具体的に改善案を考えること。

問9. 自分の郷土で衣・食・住の改善について，世論調査を行うこと。

問10. 上の結果について，改善の方法を研究し，その結果について展覧会を開き，郷土の人々を招待して説明すること。

問11. 栄養價（カロリー）の計算法を研究し，それによって最近一週間の食事について栄養價を算出すること。できれば他の書物から栄養價の表を見て，いろいろの主食と副食との栄養價の組みあわせについて調べること。

問12. ビタミンを含んでいるもの，また健康を保つ上に必要なものについて研究すること。

社会科13
文化遺産
Approved by Ministry of Education
(Date Sept. 24, 1947)

昭和二十二年九月二十四日　翻刻印刷
昭和二十二年十月　五日　翻刻発行
〔昭和二十二年九月二十四日　文部省検査済〕

著作権所有　著作兼発行者　文部省

翻刻発行兼印刷者　東京都文京区久堅町一〇八番地　日本書籍株式会社　代表者　大橋進一

印刷所　東京都文京区久堅町一〇八番地　日本書籍株式会社

発行所　東京都文京区久堅町一〇八番地　日本書籍株式会社

中村紹太